



Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動 報告2018
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動 報告2018. 2019, p. 1-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89257
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術

活動報告
2018



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	2
1. 教育プログラムの実施	6
• 大阪大学の取組	6
• 大阪大学 特色ある授業	12
• 京都大学の取組	14
• 京都大学 特色ある授業	18
• 合同講義	20
• 阪大学生の声	25
• 京大学生の声	26
2. プログラム推進委員会の運営	28
• 実施体制	28
• アドバイザー会議	29
• カリキュラムの発展及び拡充	29
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	30
3. 拠点間共同プログラムへの参画	36
• サマーキャンプへの参画	36
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	42
• 「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）	43
• その他	58
5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施	64
• 阪大拠点プロジェクト	64
• 京大拠点プロジェクト	66
6. 関西ネットワークの発展	70
• サイエンスカフェ@千里公民館	71
• 学術政策セミナー	73
7. 国際連携の推進	76
• 国際連携	76
• 海外調査及び発表等	76
8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）	80
• 大阪大学	80
• 京都大学	88

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」 (Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で 1990 年代末に過熱した遺伝子組換え作物 (GM) 論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第 4 期科学技術基本計画 (2011 年) においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠 (エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国の GM 論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立

案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与 (public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階 (アジェンダ形成段階) を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題 (期待や懸念、問題) を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表 小林傳司 (大阪大学)

❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere: STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2019年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	理事・副学長	科学哲学、科学技術社会論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	招聘教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データビリティフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
神里 達博	大阪大学COデザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	准教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任准教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
辻田 俊哉	大阪大学COデザインセンター	講師	国際政治学、国際安全保障論
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任講師	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
水町 衣里	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学コミュニケーション論、科学教育
小林 万里絵	大阪大学COデザインセンター	特任研究員 (非常勤)	
鍛冶 一郎	大阪大学COデザインセンター	特任研究員 (非常勤)	国際政治学、外交史
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授（ユニット長）	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授（副ユニット長）	可視化
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
宮川 恒	京都大学大学院農学研究科	教授	農薬化学、天然物化学
吉田 恭	京都大学経営管理大学院	特定教授	都市計画、まちづくり
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
廣井 良典	京都大学こころの未来研究センター	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
小嶋 大造	京都大学経済研究所	准教授	財政政策、農業政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
田淵 敬一	京都大学iPS細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
関根 仁博	京都大学経済研究所	特定准教授	科学技術・イノベーション政策
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
井出 和希	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	薬学、疫学、社会医学
祐野 恵	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	公共政策、地方自治、地方議会

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。



大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2018 年度 在籍者数の合計：17 人

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、基礎工学研究科：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳 民間企業：3 人）

* 副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を修得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：5 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：3 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：3 人、工学研究科：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学へ就職：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学研究科：2 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工研究科学：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学へ就職：2 人、政府・公的研究機関へ就職：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2018 年度 在籍者数の合計：10 人

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、医学系研究科：3 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

* 高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の 8 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：3 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：1 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：3 人、国際公共政策研究科：2 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：5 人

2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：2 人、工学研究科：1 人、基礎工学研究科：2 人、生命機能研究科：1 人、情報科学研究科：1 人）

修了者数：8 人

2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科学：2 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科 1 人）

修了者数：8 人

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2018 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
連携必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）
選択科目Ⅰ： 基軸科目群	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
	COデザインセンター（院）	訪問術B（体験型ジャーナリズム入門）	池田 光穂	2	夏
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	サステイナビリティ評価・技術論	東海 明宏、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	中嶋 啓雄	2	秋～冬
選択科目Ⅱ： インシュア科目群	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	夏
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	秋
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（Food Security and Sustainability）	上須 道德	2	春～夏
	法学部	特別講義（インターネット技術と法規制）	養老 真一、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	集中（春～夏）
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	通年
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	通年

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2018 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
選択科目：6単位以上	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
	COデザインセンター（院）	訪問術B（体験型ジャーナリズム入門）	池田 光穂	2	夏
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論	東海 明宏、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策 I	中嶋 啓雄	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	夏
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	秋
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（Food Security and Sustainability）	上須 道徳	2	春～夏
	法学部	特別講義（インターネット技術と法規制）	養老 真一、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	集中（春～夏）
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	通年
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	通年

❖ 大阪大学 特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論 (A, B)」(春・夏学期 隔週水曜 5・6 限)

この科目のねらいは、科学技術やイノベーションの「望ましさ」をどう実現したらよいか、そのためにはどのような問題を研究開発や政策形成において考えなくてはならないかを、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題 (Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)」の観点から、多角的に学ぶことです。ゲストの専門家による講義 (90 分) と討論 (90 分) を行い、最終回は全体を振り返っての総合討論を行っています。

2018 年度は、「科学技術イノベーション政策概論 A」では、特に、ELSI に関する研究や政策が最も早くから行われてきた生命科学を取り上げ、「科学技術イノベーション政策概論 B」では、人工知能技術やビッグデータ利用など情報科学技術を取り上げました。以下はその詳細です (ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。

「科学技術イノベーション政策概論 A」

第 1 回 (2018 年 4 月 11 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)

イントロダクション：科学技術政策と <ELSI>

第 2・3 回 (2018 年 4 月 25 日) 三成 寿作 (京都大学 特定准教授)

ゲノム研究をめぐる倫理的問題

第 4・5 回 (2018 年 5 月 9 日) 島藺 洋介 (大阪大学 講師)

臓器売買をめぐる倫理的問題

第 6・7 回 (2018 年 5 月 23 日) 小門 穂 (大阪大学 助教)

生殖医療をめぐる法的問題

第 8 回 (2018 年 6 月 6 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)

まとめ



「科学技術イノベーション政策概論 B」

第 1 回 (2018 年 6 月 13 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)

イントロダクション：情報科学技術と ELSI

第 2・3 回 (2018 年 6 月 27 日) 久木田 水生 (名古屋大学 准教授)

人工知能・ロボットの倫理的問題

第 4・5 回 (2018 年 7 月 18 日) 鈴木 正朝 (新潟大学 教授)

個人情報保護法の課題

第 6・7 回 (2018 年 7 月 25 日) 工藤 郁子 (情報通信政策研究所 特別フェロー)

ロボットと AI と法

第 8 回 (2018 年 8 月 1 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)

まとめ



「科学技術イノベーション政策概論 A」の授業レポートは、大阪大学 CO デザインセンターのウェブサイトにも掲載されています。

<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000438.php>

「科学技術コミュニケーション演習」(集中講義(夏))

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。2018年度のテーマは「東日本大震災で発生した東京電力福島第一原子力発電所事故による<被害>の問題をどう考えるか」でした。

3日間のスケジュールは次の通りで、グループワークを中心に進めました。

1日目

イントロダクション・自己紹介

講義：科学技術コミュニケーションとは何か

テーマに関する背景情報の共有と解決すべき課題について

グループワーク1：解決すべき課題の設定

2日目

グループワーク2：解決すべき課題とそのための仮説の整理

全体討議：グループごとの仮説の発表

グループワーク3：仮説の整理と専門家への質問の準備

全体討議：専門家への質問の発表



3日目

専門家との質疑応答

グループワーク4：専門家との質疑応答をふまえた討議

全体討議：グループごとの発表とゲストからのコメント

専門家としてお越しいただいたのは、文部科学省研究開発局原子力損害賠償対策室次長の山下恭範氏、公害問題や環境被害保障論などを研究している大阪市立大学大学院経営学研究科 教授の除本理史氏、東日本大震災後に放射線汚染と向き合う母親たち取材しているライターの吉田千亜氏でした。



授業レポートは、大阪大学 CO デザインセンターのウェブサイトにも掲載されています。

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000518.php>

京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

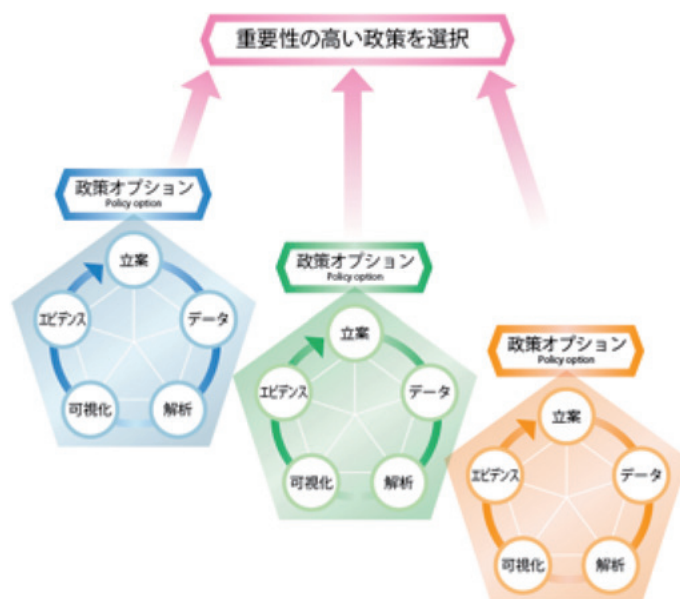


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

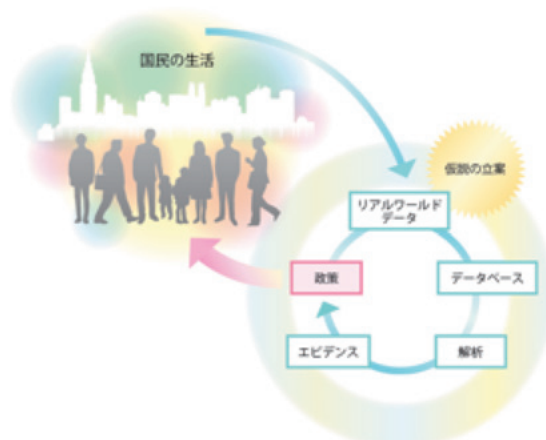


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」運営状況

研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上）

2018 年度 在籍者数の合計：15 人

履修者数：15 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：6 人、農学研究科：4 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：2 人）

* 研究科横断型教育プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度

履修者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

京都大学 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2018 年度）

区分		科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位
			前期	後期		
入門必修科目		現代社会と科学技術		○	川上 浩司（医学研究科）、他	2
必修科目		科学技術コミュニケーション演習	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
連携必修科目		研究プロジェクト	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
選択科目（8単位以上）	選択科目Ⅰ…基軸科目群（1科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上 浩司（医学研究科）、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
		学術情報リテラシー実践	○		小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		科学技術・イノベーション政策概論	○		関根 仁博（経済研究所）	2
		医薬政策・行政		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		問題解決思考		○	末松 千尋（経営管理大学院）	2
		疫学Ⅰ（疫学入門）	○		中山 建夫（医学研究科）	2
		科学技術・イノベーションと大学		○	関根 仁博（経済研究所）	2
		公共政策論Ⅰ		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング		○	伊勢田 哲治（文学研究科）	2
	選択科目Ⅱ…イシュー科目群（1科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		科学的方法による京都学実践	○		小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		応用経済学		○	依田 高典（経済学研究科）	2
		政策のための研究方法論	○		カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		医療政策の ELSI		○	カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		健康情報学Ⅰ		○	中山 建夫（医学研究科）	2
		文献評価法	○		中山 建夫（医学研究科）	1
		技術者倫理と技術経営	○		松原 厚（工学研究科）、他	2
		共生社会環境論演習 3 B		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		情報社会論	○		大手 信人（情報学研究科）	2
		現代社会論演習Ⅰ A	○		廣井 良典（こころの未来研究センター）	2
		現代社会論演習Ⅰ B		○	廣井 良典（こころの未来研究センター）	2
		まちづくりとまち経営		○	吉田 恭（経営管理大学院）	2

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術入門」(前期 木曜 1 限)、「現代社会と科学技術」(後期 木曜 4 限)

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」では、大学における学問、科学的手法、政策としての生命倫理、クリティカルシンキング、民主主義における意思決定、人口減少社会におけるまちづくり、コンパクトシティ、リスクコミュニケーション、科学技術の社会への実装などをテーマとしました。「現代社会と科学技術」では、オランダにおける農業政策、科学技術コミュニケーション、データの可視化、ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス、医療技術の質の評価、医療費の抑制と医療技術評価、計量書誌学分析、食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス、科学技術と社会、移植医療などをテーマとしました。

2014 年度からは、レポートには教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。2013 年度はレポートを提出するのみでしたが、積極的な学生が多く自分のレポートに対するコメントを求めていたので、各テーマを担当した教員がレポートに添えて学生にフィードバックするようにしました。

2018 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術入門」

第 1 回 (2018 年 5 月 10 日) 宮野 公樹 (京都大学 准教授)

大学における学問とは？分野融合・越境のダイナミクス

第 2 回 (2018 年 5 月 17 日) 小山田 耕二 (京都大学 教授)

科学的方法について

第 3 回 (2018 年 5 月 24 日) 川上 浩司 (京都大学 教授)

健康福祉政策と情報の利活用

第 4 回 (2018 年 5 月 31 日) カール・ベッカー (京都大学 特任教授)

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 5 回 (2018 年 6 月 7 日) 伊勢田 哲治 (京都大学 准教授)

クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会

第 6 回 (2018 年 6 月 14 日) カール・ベッカー (京都大学 特任教授)

研究の進め方

第 7 回 (2018 年 6 月 21 日) 佐野 亘 (京都大学 教授)

現代民主主義のもとでの政策決定

第 8 回 (2018 年 6 月 28 日) 廣井 良典 (京都大学 教授)

人口減少社会のデザインと持続可能性

第 9 回 (2018 年 7 月 5 日) 吉田 恭 (京都大学 特定教授)

コンパクトシティ政策と科学

第 10 回 (2018 年 7 月 12 日) 全教員

研究の進捗確認

「現代社会と科学技術」

- 第1回（2018年10月4日） 末松 千尋（京都大学 教授）
トランザクション・コストと経済政策
- 第2回（2018年10月11日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）
トランス・サイエンスと Participatory Technology Assessment
- 第3回（2018年10月18日） 全教員
研究の進捗確認
- 第4回（2018年10月25日） 加藤 和人（大阪大学 教授）
ライフサイエンスの倫理とガバナンス
- 第5回（2018年11月1日） 後藤 励（慶應義塾大学 准教授）
医療費の増加と医療技術評価
- 第6回（2018年11月8日） 富田 直秀（京都大学 教授）
技術の質の評価
- 第7回（2018年11月15日） 中山 健夫（京都大学 教授）
疫学とゲノム科学から社会基盤を考える
- 第8回（2018年11月22日） 田淵 敬一（京都大学 准教授）
社会と科学の関わり方—ある研究不正問題を事例に—
- 第9回（2018年11月29日） 宮川 恒（京都大学 教授）
食品のリスクアナリシスと法整備の為の科学
- 第10回（2018年12月6日） 依田 高典（京都大学 教授）
「政策のための科学」の計量書誌学データ分析
- 第11回（2018年12月13日） 小山田 耕二（京都大学 教授）
データ可視化と政策立案
- 第12回（2018年12月20日） 関根 仁博（京都大学 特定准教授）
最先端大型研究施設の整備
- 第13回（2019年1月10日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）
移植医療の社会的価値
- 第14回（2019年1月17日） 大手 信人（京都大学 教授）
水資源と森林の政策を考える
- 第15回（2019年1月24日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）
振り返りワークショップ

❖ 合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」(集中講義(夏))

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つであるサマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしました。この事前ワークショップは、京都大学と一緒に実施しています。

2018年度は、8月9日に事前ワークショップを大阪大学・京都大学合同で行いました。2016年度、2017年度に引き続き、事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田直樹さんと岩田花奈さんをお願いをしました。サマーキャンプ本番で、よりよい対話ができるようになること、また、多様な視点、多層的な課題の捉え方ができるようになることを目指して行なっている事前ワークショップ。対話の場で話し合いの環境を整える力、その場を読み解く力を向上させることをねらったプログラムを実施しました。

午前中は、自己紹介ツールを使って、それぞれの知識や経験、意見を引き出すことができるような質問の仕方を学びました。午後からは、ディスカッションをするグループと、そのグループを観察・記録するグループに分かれて、「対話の流れを可視化する」という体験をしました。



その後、8月28日からのサマーキャンプに参加しました。8月28日から30日にかけてのサマーキャンプは、政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは大阪大学からは学生6人と教員4人、京都大学からは学生4人と教員5人が参加しました。



サマーキャンプのプログラムに関しては、「3. 拠点間共同プログラムへの参画(本冊子 36 ページ以降)」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」(通年)

自らの専攻分野を生かしつつ、副専攻プログラムを通じて学んだ、科学技術イノベーションの社会的・政策的な側面についての知識をさらに深め、学術研究論文を作成する科目です。具体的には、「政策のための科学」に関連した社会課題への解決に資する研究テーマを各自が設定して、人文学・社会科学的な手法を用いた調査および分析を行います。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2018年度の合同発表会は、2018年12月8日に大阪大学中之島センターにて、大阪大学2人と京都大学4人の合計6人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2018年度 (口頭発表会：2018年12月8日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 大学におけるデュアルユース研究 ―「対話ツール」を利用した学生との議論―
- (2) “個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査 ―兵庫県を事例として―

京都大学

- (1) 指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴 ―文献検索数を用いた記述研究―
- (2) 福祉政策による社会環境変化と精神障害者のQOLとの関連 ―統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究―
- (3) 塩酸リトドリンの早産予防効果 ―データベースを用いた検討―
- (4) 市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討 ―サイエンスカフェの事例分析から―



参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013 年度 （口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム ―「翻訳」、「批判」から「構築」へ―

2014 年度 （口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 ―エネルギーを中心として―
- (2) 科学技術とフィクション ―人工子宮の現実化に寄せて―
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 ―先行研究を参考に学生側の視点を探る―
- (4) 環境ラベルに関する一考察 ―NL マークを事例にあげて―
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 ―福島市の事例をもとに―
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 ―習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化―
- (7) 科学のイメージと PR ―企業広告において「科学的である」とはどういうことか―

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 ―社会の理解のために―
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 ―医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて―
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床 ―応用への実現に関する調査研究―
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定 ―選択型実験による接近―
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 ―レセプトデータベースを用いた疫学的研究―

2015 年度 （口頭発表会：2016 年 2 月 13 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望 ―大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として―
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化 ―科学技術社会論と古典的自由主義の融合―
- (3) 日本における核融合研究と政策 ―歴史、現状、そして今後に向けて―
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて ―DNA 型証拠と足利裁判―
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査 ―大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認―

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析 ―大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える―
- (2) 問題解決における現場地の重要性 ―自転車シェア事業を手掛かりに―
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望 ―新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に―
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016 年度 （口頭発表会：2016 年 12 月 10 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 ―若手研究者に対する探索的調査―
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 ―日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて―
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について ―物理分野を中心に―
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 ―ユーザー参加の視点から―
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 ―過去の河川計画を例として―
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 ―偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」―

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策 ―奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に―
- (4) 自治体議員の研修に関する考察 ―評価グリッド法を用いた分析―
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017 年度 （口頭発表会：2017 年 12 月 9 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 ―文献調査とインタビュー調査による探索的研究―
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 ―因果関係の判定条件と規範的・価値的含意―
- (4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 ―現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて―
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 ―サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について―

京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 ―韓国の全国紙の社説を中心に―
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 ―大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討―
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 ―福島第一原子力発電所事故を例に―
- (4) 地域公共交通改革の事例分析 ―地域の持続的な移動手段確保に向けて―
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究 ―健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る―

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、加藤和人教授が講師を務めました。

🍷 阪大学生の声

ここだけで聴くことのできる「現場の方のなまの声」は僕の財産です。

足立 惇弥さん（基礎工学研究科 物質創成専攻 博士前期課程 1 年）

僕は大学入学当初から、社会の中にある科学にまつわる課題について学んだり考えたりできる場があったらいいな、と考えていました。4回生の時に受けた授業がきっかけでSTiPSのことを知り、せっかく大学院という環境にいるのだから今しかできないことをやってみたいという思いもあり、履修を決めました。個性豊かな人たちと学び合うことができるSTiPSのような場は阪大ならではのと思っています。



STiPS で学んでみて、僕が驚いたことが二つあります。一つは STiPS の人脈の広さです。政策立案に関わっている行政官、健康医療情報を伝える新聞記者、気候変動をテーマにしたドキュメンタリーを制作している映画監督など、今まさに現場で活躍している方々がゲスト講師として来てくださいます。ここでしか聴くことができない貴重なお話は、僕にとって財産になっています。もう一つは STiPS の先生方のサポートが非常にきめ細かいということです。履修を始める前は、主専攻との時間のやりくりで少し不安がありましたが、気になることがあればいつでも STiPS の先生方に個別に相談することができ、安心して履修をすすめることができます。

ディスカッションの経験を積み、自分の考えを伝えることに自信ができました。

福田 奈那美さん（理学研究科 化学専攻 博士前期課程 1 年）

私は同じ研究室の先輩から「STiPS では主専攻での研究とはまた違う頭の使い方ができるからお勧め」という話を聞いていました。先輩が「主専攻での研究と並行して STiPS で学ぶことで、視野が広がり、ものの見方が多様になる」と話すのを聞いて、面白そう、と、気軽な感じで STiPS の履修を決めました。



私は、卒業後企業に就職することを見すえ、STiPS でディスカッションの経験を多く積みたいと思っていました。組織の中で働くときにはさまざまな背景をもつ人たちに自分の意見を整理して説明する力が必要だと思うのですが、私には STiPS を履修するまでそういった経験がほとんどなく、苦手意識をもっていました。STiPS の授業でディスカッションに参加した最初の頃は、なかなか自分の意見を言うことができませんでしたが、まわりの人たちをお手本にして「なるほど、こんなふうにすると自分の考えていることをうまく伝えられるのだな」と学ぶことができました。それを自分でもやってみることで少しずつ自分のやり方が見えて、自信がついてきたと思います。自分の発言でディスカッションの流れが変わったり、グループの意見の幅が広がったりすることを感じることも多くなってきました。

市民参加型ワークショップでファシリテーターを経験しました。

池田 耕介さん（工学研究科 環境・エネルギー工学専攻 博士前期課程 2 年）

僕は自動運転をテーマにした市民参加型ワークショップにファシリテーターとして参加しました。この2年STiPSで学ぶあいだ、授業やイベントなどで数多くのディスカッションに参加してきました。その経験を生かして、今度は大学の外でディスカッションを組み立てる立場となったのです。さまざまなバックグラウンドを持つ市民の方々が実際に議論する場で、全員が発言しやすいようにしたり発言の内容を整理したりするという経験は、何ものにも代えがたいものになりました。STiPSの後輩たちにアドバイスしながら、一緒にワークショップに取り組んだことも刺激になりました。



僕は、大学院卒業後、建設系のコンサルティング会社に就職することが決まっています。業務の中では事業内容を市民に説明する場面などもあるので、STiPSでの経験を生かすことができるのではないか、と思っています。また、将来の目標としては、科学技術分野で研究されていることを社会全体に還元する、まさに「科学技術と社会をつなぐ」ということに少しでも関わっていきたいです。STiPSで学ぶことによって、より一層その思いが強くなってきています。

京大学生の声

社会を見る目が変わる

藤田 このむさん（農学研究科 資源経済学専攻 修士課程 1 年）

『つなぐ人材になる』と言うのは、もしかしたら、大多数の人には響かないのかもしれない。なんて抽象的なんだ、つまりそれはどういう人材を指しているのだ、と。しかし修士1年の春、その言葉は私にとっても響いた。自分の主専攻の枠を超え、科学と社会との接点を見つけることにとても興味が湧いた。

STiPSを受講してみると、自分が思い描いていた主専攻と社会の接点はとても小さな世界でしか描けていないことに気付いた。医療や教育、まちづくりなど多様なバックグラウンドを持った講師がそれぞれの切り口で科学と社会の接点を提示してくれる。そんなことは知らない、専門外だと言ってしまえばそれまでだ。しかし、今まで考えてこなかったトピックに触れ、議論し、自分の知識を総動員して自分なりの意見を持つことを繰り返していくと、どんどん社会の見方が変わってくる。STiPSのおかげで、自分の研究の社会での立ち位置を考えるようになった。

副専攻を履修することは自分の覚悟と周囲の理解が必要である。しかし、それらを準備した上で皆さんにもSTiPSで新たな発見をしてほしいと強く願っている。

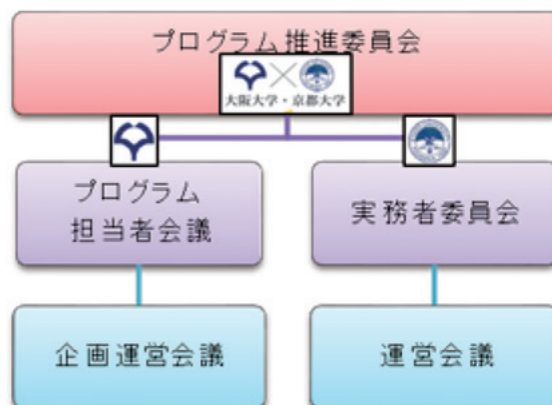


2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2018 年度は 5 月 30 日、8 月 28 日、12 月 8 日の計 3 回実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主に CO デザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。

カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 21、うち新設科目数は 7 でしたが、2014 年度の開講科目数は 30、うち新設科目数は 9 となりました。2015 年度の開講科目数は 29、2016 年度の開講科目数は 32 でした。2017 年度には、4 学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は 36 になり、2018 年度の開講科目数は 37 でした。京都大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目追加し 23 科目となり、2015 年度の開講科目数は 23、2016 年度の開講科目数は 25、2017 年度の開講科目数は 23、そして、2018 年度の開講科目数は 27 でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっていきます。

❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第 39 回 STiPS Handai 研究会】 日本人の死生観から生命倫理を学ぶ	2018 年 7 月 17 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミューラチラング	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター
【第 40 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方」第 1 回 京都大学総合博物館・塩瀬隆之さん	2018 年 12 月 4 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 41 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方」第 2 回 徳島大学副学長・斉藤卓也さん	2018 年 12 月 11 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 42 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方」第 3 回 NPO 法人市民科学研究室・上田昌文さん	2018 年 12 月 18 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 43 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方」第 4 回 京都大学 iPS 細胞研究所 国際広報室・和田濱裕之さん	2019 年 1 月 8 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。

【第 44 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方」第 5 回 朝日新聞 科学医療部 記者・合田禄さん	2019 年 1 月 15 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・commons 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 45 回 STiPS Handai 研究会】 「科学技術×公共政策」第 1 回 日本の原子力政策史	2018 年 12 月 20 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・commons 2 階 セミナー室 C	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
【第 46 回 STiPS Handai 研究会】 「科学技術×公共政策」第 2 回 日本の科学技術イノベーション政策	2019 年 1 月 10 日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・commons 2 階 セミナー室 C	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
【第 47 回 STiPS Handai 研究会】 “Between Documentaries and Science”第 1 回 “Documentary as Research: Communication for Change and Impact”	2019 年 1 月 15 日	大阪大学全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ)	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊特別講義 「Effectively Communicating Your Science and Research」の一環として開催。
【第 48 回 STiPS Handai 研究会】 “Between Documentaries and Science”第 2 回 “Seeing is Believing: Successful collaborations between Scientists and Film-makers”	2019 年 1 月 29 日	大阪大学全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ)	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊特別講義 「Effectively Communicating Your Science and Research」の一環として開催。

学術政策セミナー ―大学のこれからを考える―			
【第 10 回学術政策セミナー】 大学職員の知恵と力を生かすしかけ	2019 年 3 月 1 日	大阪大学共創イ ノベーション棟 2 階 会議室	主催：大阪大学経営企 画オフィス研究支援 部門 共催：STiPS
【第 11 回学術政策セミナー】 エビデンスに基づく政策立案を考える～大 学の研究や教育の推進を事例として～	2019 年 3 月 8 日	大阪大学全学教 育推進機構 管 理・講義 A 棟 A212 (HALC1)	主催：大阪大学経営企 画オフィス研究支援 部門 共催：STiPS
サイエンスカフェ@千里公民館			
サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ！―『幹細胞かるた』で考 えてみよう」 ＊台風のため中止	2018 年 9 月 4 日	千里公民館 第 1 講座室	主催：豊中市立千里公 民館 共催：STiPS、大阪大 学 CO デザインセンタ ー
サイエンスカフェ@千里公民館「ゲームで生 活習慣病を防ぐ!? ～みせたくない自分を “仮想の自分”でみせるコミュニケーション 手法が持つ力～」	2018 年 12 月 18 日	千里公民館 第 1 講座室	主催：豊中市立千里公 民館 共催：STiPS、大阪大 学 CO デザインセンタ ー
サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ！―『幹細胞かるた』で考 えてみよう」	2019 年 1 月 8 日	千里公民館 第 1 講座室	主催：豊中市立千里公 民館 共催：STiPS、大阪大 学 CO デザインセンタ ー
拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）阪大拠点の一環として開催			
ワークショップ「宇宙政策の未来についてみ んなで考える」@大阪	2018 年 5 月 19 日	UMEDAI 大 阪・梅田会議室	主催：STiPS 共催：九州大学科学技 術イノベーション政 策教育研究センター、 大阪大学 CO デザイン センター 後援：大阪大学 21 世 紀懐徳堂
政策立案ワークショップ（ゲノム）第 1 回	2018 年 9 月 21 日	エキスパート倶 楽部（東京都千 代田区）	主催：STiPS

政策立案ワークショップ（ゲノム）第2回	2018年 11月16日	エキスパート倶楽部（東京都千代田区）	主催：STiPS
政策立案ワークショップ（ゲノム）第3回	2019年 1月26日	UMEDAI 大阪・梅田会議室	主催：STiPS 共催：共に考えるゲノム編集の未来（JST「科学技術コミュニケーション推進事業未来共創イノベーション活動支援」平成30年度採択事業）
その他			
CO デザインカフェ 第2回「異分野とつながる、社会とつながるために」	2018年 4月17日	大阪大学全学教育総合棟1 3階341号室（COデザインスタジオ）	主催：大阪大学 CO デザインセンター プログラム提供：副専攻プログラム/高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」
ワークショップ「安全保障研究と大学の関わりについて考える、大学×デュアルユース」	2018年 10月17日	大阪大学全学教育推進機構ステューデント・commons 2階セミナー室 A	主催：STiPS
シンポジウム” Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience”	2018年 11月2日	Osaka Innovation Hub（大阪イノベーションハブ）	主催：オーストラリア国立大学、豪日交流基金、オーストラリア大使館、大阪大学 CO デザインセンター、STiPS 共催：Osaka Innovation Hub（大阪イノベーションハブ（大阪市））

第2回仙北インパクトチャレンジ	2018 年 11 月 28 日	あきた芸術村 (秋田県仙北 市)	主催：仙北インパクト チャレンジ実行委員 会 共催：京都大学学際融 合教育研究推進セン ター政策のための科 学ユニット
市民参加型ワークショップ「自動運転のある 暮らし：誰もおいていかない移動のデザイン とその倫理」	2018 年 12 月 9 日	京都府立京都 学・歴彩館 1 階 小ホール	主催：日本生命倫理学 会 共催：STiPS、大阪大 学 CO デザインセンタ ー

3. 拠点間共同プログラムへの参画

3. 拠点間共同プログラムへの参画

サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2018 年度

実施日：2018 年 8 月 28 日から 30 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 4 人、京都大学からは学生 4 人と教員 5 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013 年度

実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度

実施日：2014 年 8 月 31 日～9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度

実施日：2015 年 8 月 21 日～23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度

実施日：2016 年 9 月 15 日～17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

2017 年度

実施日：2017 年 8 月 20 日～22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

2018 年度の体制

主催：SciREX 基盤的研究・人材育成拠点

幹事校：政策研究大学院大学

2018 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「2030 年の社会と科学技術イノベーション」

我が国では少子高齢化と人口減少が進み、経済規模の縮小、社会保障制度と財政の持続可能性、国際競争力の低下など様々な課題が懸念されています。世界ではエネルギー・水・食料等の資源不足、地球環境問題、感染症、テロ問題など、数多くの複雑な問題に直面しています。そこで今、科学技術がこのような国内外の課題に取り組み、社会の持続的発展に貢献していくことへの期待が大変高まっています。2018 年度の SciREX サマーキャンプでは、こうした社会の現実を踏まえて、2030 年の目指すべき未来社会と科学技術イノベーションの戦略・政策を中長期的かつ大局的な視点で考えます。グループワークでは、多様なバックグラウンドを持った参加者が協働して政策課題を発見し、エビデンスに基づき具体的かつ新規の政策提言にとりまとめること、さらに、それらを政策担当者・実務家に向けて提案する過程を経験します。



学習のねらい（プログラムより）

- ・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築します。
- ・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学びます。
- ・複数の将来ビジョン・シナリオを共有した上で、テーマごとに、政策担当者や実務家へのヒアリング等を行ない、エビデンスに基づいた具体的な新規政策プランの作成を実践的に行います。

サマーカーンプのプログラム

	8月28日(火)	8月29日(水)	8月30日(木)
午前	10:00-12:00 プレセッション（自由参加） ・「イノベーションとは何か、政策は何を目指すべきか（仮）」江藤 学（一橋大学） ・「科学技術イノベーション政策とは何か」「科学技術イノベーション政策の歴史」赤池 伸一（文部科学省科学技術・学術政策研究所）、有本 建男（政策研究大学院大学） ・「科学技術イノベーションのガバナンスと社会の関係（仮）」松尾 真紀子（東京大学）、平川 秀幸（大阪大学）	朝食 9:00 集合 9:00-14:00 グループワーク： グループごとにサイトビジット等	朝食 9:00 集合 9:00-12:00 グループワーク： 最終発表会に向けての準備
午後	12:30-13:00 受付 13:00-13:15 開会式 13:15-14:00 オリエンテーション SciREX 事業紹介・参加者紹介 14:00-16:15 全体セッション 基調講演「自動運転がもたらす街と社会の変化」 パネルディスカッション「自動運転を受け入れる社会をどうつくっていくのか」 16:15-16:30 休憩 16:30-18:30 グループワーク 18:30-20:30 懇親会 ポスターセッション 20:30- 自由時間	14:00-16:30 グループワーク：中 間発表会の準備 16:30-18:30 中間発表会 18:30-19:30 夕食 19:30- 自由時間	13:00-16:00 最終発表会 16:00-16:45 閉会式 表彰 総合講評、閉会挨拶 16:45 解散・帰宅

グループワーク（プログラムより）

A. 科学技術イノベーションの基盤

A-1.基本計画「10年後の第8期科学技術基本計画に向けたエビデンス構築」

ファシリテーター：林 隆之（GRIPS）

サポート：岡村 麻子（GRIPS）、富澤 宏之（NISTEP）

A-2.大学「2030年の日本の大学像と需要の予測」

ファシリテーター：吉岡（小林） 徹（東京大学）

B. 科学技術イノベーションと経済・社会的課題

B-1.エネルギー「2030年エネルギーミックスの実現を考える」

ファシリテーター：青島 矢一（一橋大学）

サポート：谷口 諒（一橋大学）

B-2.宇宙「日本の宇宙政策—2025年以降の国際宇宙ステーション（ISS）と宇宙探査—」

ファシリテーター：渡邊 浩崇（大阪大学）

B-3.医療「持続可能な医療政策～エビデンスベースドポリシーの実現を目指して」

ファシリテーター：祐野 恵（京都大学）

サポート：井出 和希（京都大学）、カール・ベッカー（京都大学）

B-4.ELSI「イノベーション政策におけるELSI・ガバナンス課題の検討—新たなバイオテクノロジーの社会導入を事例に」

ファシリテーター：平川 秀幸（大阪大学）

サポート：黒河 昭雄（RISTEX）、松尾 真紀子（東京大学）

B-5.子どもの安心「児童虐待の根絶—科学技術に何ができるか」

ファシリテーター：永田 晃也（九州大学）

サポート：小林 俊哉（九州大学）

B-6.SDGs「SDGsと科学技術・イノベーション（STI）」

ファシリテーター：飯塚 倫子（GRIPS）

サポート：鈴木 和泉（GRIPS）

C. 科学技術イノベーションの分析

C-1.データ「データで解析する科学技術イノベーション」

ファシリテーター：池内 健太（GRIPS）

サポート：小柴 等（NISTEP）、佐々木 達郎（GRIPS）

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを実施しました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2018 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

🌟 「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

第 39 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：日本人の死生観から生命倫理を学ぶ
- ゲスト：カール・ベッカー（京都大学学際融合教育研究推進センター 特任教授）
- 日時：2018 年 7 月 17 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 1 階
カルチエ・ミュルチラング
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2018 年 7 月 17 日（火）、京都大学のカール・ベッカーさんをお招きして、第 39 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「日本人の死生観から生命倫理を学ぶ」を開催しました。この日の会場（大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング）には、17 人が集まりました。学外からお越しの方や大阪大学の教員も参加しました。

ベッカーさんからは、1 時間ほどで、おもに高齢社会の観点から現在の医療技術や施術の実態について、日本の伝統的な考え方や経験智を参照しながら、問題提起がおこなわれました。キーワードとしては、「直線的ではなく循環的な考え方や社会のシステム」、「現在だけにとどまらず、祖先や子孫まで見据えた時間感覚」などがあげられ、その事例が示されました。



その上で、現在の日本の高齢者医療の実態やその問題点などが提示されました。たとえば現状では（一度始めたとなかなかやめられない）呼吸器などの延命治療は、患者の事前指示は無くとも多く施術されていること。政府の財政は逼迫していて、国民の負担がさらに増えることになるのに、次々と医療が施され、税金が投入されている現状。そしてその背後にある、施術をすることで医療機関が儲かるようになってしまっている社会システムの問題。また、今の日本では、メディアが死者を映さないことに象徴されるように、社会全体で「人間はいつか死ぬ」という現実を踏まえた議論がおこなわれていないことなどがあげられました。

また、脳死状態における臓器提供については、フランスや台湾などでも活発な国民議論がおこなわれていたり、アメリカでは運転免許証の更新時にレクチャーがおこなわれたりするなど、各自が考えざるを得ない時代になっている。それに対し、日本では法律はあるものの、国民はその内容を知っているとは言えない状況で、議論すらおこなわれておらず、法律や医療現場での対応と、国民の意識が乖離してしまっていることなどが指摘されました。



ベッカーさんの話題提供に引き続いた質疑応答・ディスカッションの時間には、「今の日本は総じて議論をしたがらない空気があって、とくに死などのしんどい話題を話したがりないがどうしたら良いか？」といった問いや、「大学が社会に出て行ってさまざまな議論を活発にしていける必要があるのでは」など、熱心な意見交換がおこなわれました。

第 40 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方シリーズ #1 京都大学総合博物館・塩瀬隆之さん
- ゲスト：塩瀬 隆之（京都大学総合博物館 准教授）
- 日時：2018 年 12 月 4 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2018 年 12 月 4 日（火）に、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」の第 1 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日は、京都大学総合博物館の塩瀬隆之さんをお招きしました。「博物館の展示をデザインする～時間を超えて人と人がつながる仕掛けづくり～」というテーマで、塩瀬さんが実践されてきたさまざまな活動についてご紹介いただきました。会場には学内・学外あわせて、52 人の参加者が集いました。



まず塩瀬さんは、博物館を「時空のすれ違い」をつなぐ場であるという独自の博物館像をお話されました。博物館は、鑑賞するわれわれを含めて、本来同時に存在しないはずの異なる時代の展示物が一堂に会する特異な場とのこと。ただ、多くの方は、展示物の前をなんとなく通り過ぎたり、与えられた説明に対して受け身で鑑賞したりするかもしれません。「じっくり展示物を鑑賞」してもらうために、単なる展示物鑑賞という枠を飛び出し、塩瀬さん自身が思い描く博物館像を実現すべく、体験型のワークショップをいくつも展開されているそうです。今回はその一部を映像や資料を交えてご紹介いただきました。

なかでも特徴的だったのは、「参加者が展示品になってみる」という前代未聞とも言える企画。「〈博物館〉と〈市民〉をつなぐ」ことを目的として、開館前の三重県総合博物館で行われたもの（ワクワクワークショップ「100 年残す!? 三重のモノ、コト、ワタシ」）だそうです。ワークショップの参加者は博物館の搬入口に集合し、展示物を撮影したり、保存のための処理をしたりするスペースも通過しながら、保管庫の中を見学し、最終的には、展示ケースに入って並んでみるという、収蔵物・展示物を通る一連のプロセスを体験することができました。このワークショップでは、参加者全員が展示ケースに並ぶことができましたが、実際には博物館の収蔵物すべてが表に展示されるとは限りません。本来は、その展示会ごとのテーマによって展示されるものが選ばれます。「普段見ている展示物がさまざまな背景（ストーリー）をもって目の前に在る」ということを、身をもって体験し、そのことによって参加者は、自分で博物館の楽しみ方を発見できるのではないかということでした。つまり、このワークショップでの体験を通して、博物館で単に受け身で鑑賞をするのではなく、展示物それぞれのストーリーを想像する、いわばコミュニケーションする場として博物館を捉えることができるようになる、ということを目指したのだそうです。

こうしたワークショップという形態はどうしても対象を限定してしまうという課題が付きまといまいます。参加者からのそうした旨の質問に対しての塩瀬さんの返答は非常に示唆的でした。例えば、科学技術に関わるイベントを実施すると、参加者はどうしても科学に関心のある人や、専門的な素養のある人に限られてしまいます。大多数の人々は科学と日々暮らしを共にしているにもかかわらず、そこに興味関心を持たなかったり、そもそもワークショップへの参加に抵抗があったり、また、専門的な内容にひるんでしまったりするかもしれません。結果的にこれらの条件を満たす特定の層へのアプローチに留まってしまうことが主催側の切実な悩みとしてしばしば挙げられます。それに対して、塩瀬さんは「いかに親しみのある内容を届けることができるか」だとお話されていました。その具体的な実践例として挙げられたのは、化学と和菓子のコラボレーション企画「和菓子でまなぶ化学—理論化学者と和菓子職人が語る教室—」でした。これは、2018年12月9日まで開催されていた企画展「ノーベル賞化学者を育んだ教室」の関連イベントとして行われたもので、この会のために新しくデザインされたフロンティア軌道理論が表現された和菓子を試食しながら、理論化学者と和菓子職人のお話を聞くという会だったそうです。この企画展では他にも、理論化学を説明するために折り紙を使った展示もあったとのこと。関心をもってもらえそうな話題の中に、たとえ少しでもこちらの伝えたい要素が入っていれば、普段は接する機会のないことでもいつのまにか興味をもらえるかもしれない。そのような発想でワークショップなどを企画しているとおっしゃっていました。

ここでも、塩瀬さんが強調されていたのは、参加者自身と対象展示との積極的なかわり、そのプロセスを通して「自分で発見する」ということが、純粋な楽しみを生み、結果として学びや理解が促進される、ということでした。

こうした取り組みをされている塩瀬さんが普段から意識されていること、塩瀬さんの活動の原動力などをお伺いすると、「とにかく、どうすればおもしろくなるかを日々考えている」とのことでした。いかに好奇心を折らないかということに心を砕くと。その強い信念が垣間見られるかのようなお答えをいただきました。

こうした参加者とのやり取りは、終了予定時間を過ぎてもなお、その熱冷めやらず、強い好奇心に動かされた参加者が積極的に塩瀬さんとのお話を楽しまれていました。

文：西川 晃弘（文学研究科 博士前期課程 1年）、「科学技術コミュニケーション入門B」担当教員

第 41 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方シリーズ #2 徳島大学 副学長・齊藤卓也さん
- ゲスト：齊藤 卓也（徳島大学 副学長）
- 日時：2018 年 12 月 11 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2018 年 12 月 11 日（火）、徳島大学副学長の齊藤卓也さんをお招きして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」第 2 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の会場（大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階セミナー室 A）には授業の履修者以外の学生や学外の方など、計 23 人が参加しました。



齊藤さんはこれまでも何度か STiPS Handai 研究会にお越しいただきました。昨年お招きした際（2017 年 7 月 11 日開催）には文部科学省でお仕事をされていましたが、現在は徳島大学の副学長を務めていらっしゃいます。今回は国と地方の両方の視点からお話しをしていただきました。齊藤さんの根底にあるのは「この先の日本が、自分の子供たちの世代においても、日本に生まれて良かったと思える国であってほしい」という思いだそうです。資源のない日本が長期的に国力を維持するために必要なのは高度人材である、という考えを冒頭に述べられました。

まずは自己紹介を兼ねて、齊藤さんがこれまで考えてこられたことや自身のキャリアパスについてのお話がありました。大学は理系の学部に進学された齊藤さんですが、エネルギー問題に興味を持ったこともあって科学技術庁に入庁し、大型実験施設の整備や科学技術に関わる事故への対応にはじまり、予算調整の仕事、科学技術担当大臣の秘書官など、科学技術政策全般を経験されてきたそうです。国家公務員は激務ではあるものの、日本全体を俯瞰することができる、その分野のトップクラスの専門家と一緒に仕事ができるといった国家公務員ならではのやりがいについても触れられていました。その後、徳島に赴任して感じた「霞が関からは見えなかった地方の強みと弱み」について分析しながら、科学技術政策に係る現在の日本が抱える課題と今後目指すべき方向性へと話が展開されていきました。

齊藤さんからは、「日本から見た徳島＝世界から見た日本？」という参加者への投げかけもありました。具体的には、「小さな地方都市の徳島だったとしても、違う価値観で戦えば十分東京とも渡り合える」というコンセプトを紹介しているサイト「徳島は宣言する VS 東京」を紹介しながら、様々な問題が表面化してきた日本の科学技術も見方を変えればまだまだ大きな可能性を秘めているのではないだろうか、というお話でした。

しかし、そのためには合理的な政策策定のための新しい仕組みが重要だと主張されていました。AIの台頭で社会の大変革期にあるこの時代において、これまでのような「現状+あるべき姿」から今やるべきことを決めるという方法では行き当たりばったりの政策になってしまう。目指すのは「局所最適ではなく全体最適」であり、これを達成するには現在の審議会行政には限界がある、とのことでした。実際に斉藤さんが取り組まれた活動等も織り交ぜながらお話をしていただいたので、現在の課題と解決のための1つの方向性が端的に理解できました。

最後に、日本の強みと弱みについて、そして、現場の声を政策に活かすための実践例についてお話いただき、参加者との質疑応答・ディスカッションに移りました。参加していた学生からは、様々な活動で拾い集めた現場の声がどのように政策に反映されているのかという質問や、そもそも決定された政策を見ると現場の声が伝わっていないように感じるの何が問題となっているのかという質問が出ました。斉藤さんが強調されていたのは多様性とバランスを確保することの重要性です。もともと政策形成に関わるのは一定の年齢以上のいわゆる「お偉いさん」であることが多く、多様な年代から成る現場の



声が届きにくい環境があります。これまでは現場の声を拾う仕組みがほとんどなかったため、斉藤さんは「日本の科学を考えるガチ議論」のような研究現場の声を届けるチャンネル作りを行ってこられました。しかし、個々の主張はあっても、大学としての声、研究者全体としての声にはなっていないため政策にはなかなか反映されにくいという課題もあるとのことでした。現場の声を“全体として”伝える重要性を理解できる回答でした。その他にも時間ギリギリまで質問が相次ぎ、研究会終了後も斉藤さんの周りで活発な議論が巻き起こっていました。

文：足立 惇弥（基礎工学研究科 博士前期課程 1年）、「科学技術コミュニケーション入門B」担当教員

第 42 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方シリーズ #3 NPO 法人市民科学研究室・上田昌文さん
- ゲスト：上田 昌文（NPO 法人市民科学研究室 代表理事）
- 日時：2018 年 12 月 18 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2018 年 12 月 18 日（火）に、NPO 法人市民科学研究室（以下、市民研）の上田昌文さんをお迎えして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」第 3 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。授業を履修している学生や大阪大学教職員に加えて、学外からの参加者など計 18 人が集まりました。

上田さんによる話題提供「科学技術と社会をつなぐ仕事を創る」の中では、以下のようなことをご紹介いただきました。

- ・上田さんが代表理事をされている市民研が目指していること
 - ・市民研を立ち上げるまでの経緯
 - ・上田さんが考える「市民科学」について
 - ・市民研を運営するにあたり大切にされていること
- など。



「市民科学」という言葉を最近よく耳にします。ある分野に興味を持つ一般の人が、科学者とデータや論文を共有し、研究活動に参加する、つまり科学研究課題を市民と研究者が協力して解決し、科学を発展させようという活動を指すことが多いかもしれません。これに対して、市民研が取り組んでいるのは「社会問題解決型」の市民科学です。市民が抱える課題のために市民が創る科学。身近な科学技術に関する問題を市民が市民のためにわかりやすく紹介したり、生活の場面で違和感を持った市民と研究者・行政・企業を繋いだり、何度も勉強会を重ねたり、といった活動をされています。このような活動を職業として成り立たせている人は日本では数えるほどしかいないのではないのでしょうか。

市民研の実践内容と実践を継続する上で大切にされていることとして、以下のようなお話がありました。

1) 仕事を超えて、志を同じくする人があつまる「志縁」を大事にしたい。

市民研は会員からの支援で成り立っている組織です。この志を市民科学の実践にどうつなげていくか、ということを実は日々考えて活動をされています。また、市民研の活動を継続するためには「いい人」に関わってもらうことが重要です。一緒に活動したいと思える環境を整えつつ、「いい人」を見つけたら一緒にやろう！と言えるだけの機動力、調査力が必要なのだそうです。

2) 市民研の調査の結果を社会変革（の可能性）につなげたい。

市民研が心がけているのは、分かりやすい説明と正確な情報、そして中立な意見です。そのために学会に足を運んだり、科学者への質問やインタビューを繰り返し行なったりと、地道な努力を続けているそうです。数年かけて研究するテーマもあります。市民研を維持していくためには、議員や行政、企業などとの関係性も大切にしています。無理な要求がくることもあります。そのような場面もうまくやりくりして、市民と市民研、行政や企業と市民研の良い繋がりを維持することで市民のためのコンテンツを発信し続けることができているのだそうです。

3) 生活をよりよくするための科学を学ぶ場を提供したい。

科学への好奇心を喚起させるために、市民研では子ども料理科学教室や小学校での出前授業を行っています。例えば子ども料理科学教室では、炊飯器を使わずにお米を炊いたり、初めに完成した料理を食べて、どんな食材がどんな調理法で使われているのか子どもたちに考えてもらったりするコンテンツがあります。子どもたちに、自ら考え、そして、試すことができるようになってもらいたいという思いで実施されているそうです。

上田さんがどのようにして市民研を発展させ、自分の仕事を「食べていける」までにしたのか、というお話は、参加者にとって刺激的だったようです。参加者からは「自分の意思を一から実現したのはすごいと感じた」、「自分の軸や信念をしっかり持っていらっしゃるから、質問の答えにもとても説得力があった」「『世の中にない仕事をつくる』ということを成し遂げつつある人という印象が強い」というコメントが寄せられました。上田さんは、「幾つもの偶然が重なって、今の仕事に結びついた」とおっしゃっていました。しかし、この巡り合わせはおそらく偶然ではなく必然ではないか、上田さんが目指すことを成し遂げるために着実に準備をしていたからこそ、今本当にやりたいことを仕事にできているのではないか、と感じられるお話でした。

文：林 美穂（生命機能研究科 博士前期課程 1 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 43 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方シリーズ #4 京都大学 iPS 細胞研究所・和田濱裕之さん
- ゲスト：和田濱 裕之（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）国際広報室 特定研究員）
- 日時：2019 年 1 月 8 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 1 月 8 日（火）に、京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）の和田濱裕之さんをお迎えして、つなぐ人たちの働き方シリーズ第 4 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。授業を履修している学生や大阪大学教職員に加えて、学外からの参加者など計 20 人が集まりました。

5 回に渡って行われている「つなぐ人たちの働き方シリーズ」は、科学技術をはじめ様々な分野の専門知識を一般の人にどのように伝えることができるか、よりよく伝えるためにどのような方法を取っているかなどを、日々実践を行っている現場の方々から直接お話を聞くことのできる機会です。第 4 回は、研究機関で広報という役割を担っている方のお話でした。



和田濱裕之さんは CiRA の国際広報室でサイエンスコミュニケーターとしてお仕事をされています。大学院生の頃は、ダイズタンパク質について研究をされていたこともあり、遺伝子組換えダイズに関わる専門家と市民の認識のギャップに問題意識を持っていたそうです。博士号取得後は、当時大阪大学で実施されていたインターンシッププログラムを活用して、理化学研究所内の国際広報室で科学コミュニケーションに関する実務経験を積み、2012 年から今の職場でお仕事をされています。

CiRA 国際広報室の基本方針は「市民に誠実な広報をする」こと。正確で適切、そして透明性のある情報発信を心がけているそうです。また、CiRA には大きな予算が投じられていることもあり、その説明責任を果たすこと、そして、iPS 細胞研究・技術への理解を深めてもらうための役割を果たすこともミッションの一部です。

国際広報室の業務は大きく 2 つに分けることができます。1 つは「一般市民向け」、もう 1 つは「メディア向け」です。

一般市民向けの業務の具体例としては、まず、誰でも参加することのできるシンポジウムの開催が挙げられます。他にも、患者さん向けの小規模イベントや子ども向けのワークショップの実施なども行っています。シンポジウムが、一方的な情報発信の場になりがちであるのに対して、患者さん向けのイベントは、iPS 細胞研究の現状を伝えながら患者さんの意見も聞くことのできる双方向的なコミュニケーションの場です。子ども向けのワークショップでは、かるたやすごろくなどのゲームを使いながら、難し

い内容をできるだけやわらかく伝えることを目指しています。特に、「幹細胞かるた」に関しては、子どもだけでなく、日本語が分からない海外の方でも楽しんでもらえるツールになっているそうです。

マスメディアを活用することによって、より多くの人に情報を届けることができます。そのため、メディア向けの仕事も大切です。具体的な業務としては、取材対応や書籍の原稿の確認、テレビ番組への出演依頼の調整などがあります。どの番組に出演するのか、どんな内容にするのか、などは、慎重に判断をしているそうです。

このように、国際広報室に所属している和田濱さんは、研究者と記者、または、研究者と一般市民との間の橋渡し役をしていらっしゃいます。ただ、広報をする上でのジレンマも存在するそうです。研究者側としては、より多くの人に研究の成果を知ってほしいという気持ちで広報を行うものの、その研究成果に関する報道が患者さんに過度な期待を抱かせてしまうようなことになってしまうのは本意ではありません。情報を単に広めるのではなく、できるだけ情報を受け取る側に誤解されないように注意を払って情報発信を行っているそうです。

当日参加をしていた人たちからは次のような感想が寄せられました。「徹底的に信頼を崩さないための戦略が聞けておもしろかった。」「身近なようで実はあまり細かく知らない広報の仕事がよく分かった。特に知名度の非常に高い研究所ならではの悩みもお話頂けたことで、多面的な考えを知ることができた。」

文：KIM DAEUN（経済学部 4 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員



第 44 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方シリーズ #5 朝日新聞 科学医療部 記者・合田緑さん
- ゲスト：合田 緑（朝日新聞大阪本社科学医療部 記者）
- 日時：2019 年 1 月 15 日（火）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 1 月 15 日(火)、朝日新聞科学医療部 記者の合田緑さんをお招きして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」第 5 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の会場（大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階セミナー A 室）には、「科学技術コミュニケーション入門 B」の授業履修生以外にも、メディアに興味のある大学院生や学外からお越しの方々計 22 人が参加しました。



合田さんには、まず、「サイエンスを伝えるメディアは、いま何を考えているのか」というタイトルで 50 分程の話題提供をしていただきました。合田さんは、京都大学大学院農学研究科の修士課程を修了された後、朝日新聞社に就職され、現在は科学医療部の記者として、再生医療や医療事故、研究不正などの記事を担当されています。例えば、無痛分娩に関わる事故に関して、遺族側と医者側の相反する両者の考えを取材し、記事にされています（「『無痛分娩、長女に障害』和解 両親、京田辺市の医院側と」2019 年 1 月 8 日掲載）。また、2018 年 12 月には、ノーベル医学生理学賞のメイン担当記者として、ノーベル賞授賞式の取材のためにストックホルムに足を運ばれたそうです。「科学医療」という多岐にわたる内容を取材されている経験から、多様化するメディアについての現状やサイエンスを伝えるという仕事について、詳しくお話して頂きました。

近年、紙メディアである新聞の需要が減少する一方で、ウェブメディアが多様化しています。朝日新聞社は紙メディアの印象が強かったのですが、紙面だけではなく多くのウェブメディアにも力を入れているそうです。ウェブサイトの 1 つである「朝日新聞デジタル」では、文章だけではなく動画を用いた記事も増えてきています。また、特定の分野やターゲットに特化したバーティカルメディアの需要も増加しているそうです。例えば、若者向けの記事を扱う「withnews」や、30 代前後の女性向けの記事を載せた「telling,」、認知症の方とその家族に向けた「なかまある」などがあり、それぞれの読者層のニーズに合わせた記事が集められています。同じニュースでも、どのメディアに掲載するかによって記事の文章を変えることもあるということでした。多くのメディアがある中、朝日新聞社としてどのような記事を掲載すべきか、日々考え続けているそうです。

また、デジタル上での読者の興味を分析する「Hotaru」という最新技術を用いたシステムが朝日新聞には導入されているそうです。このシステムにより、どのような記事が読まれているかを、リアルタイム

ムで記者や編集者が把握することができ、紙面に載せる記事にも反映させることができるそうです。新しい技術を活用しつつ、「自分が書きたいこと」だけでなく、「読者が読みたいと思うこと」と「伝えなければならないこと」を考えながら日々取材をしているというお話が印象的でした。

合田さんには、企業や大学など様々な団体から 1 日に 30 通程度のプレスリリースが届きます。科学医療部として約 5 年間働いてきた今では、タイトルを見るだけで読者が興味をもちそうな内容かどうか、記事にする価値があるかどうかなどをすぐに選別し取材対象を絞ることができるそうですが、この能力はもともと持っていたものではなく働きながら身につけてきたということで、社会人になってからも熱心に学び続ける姿勢の大切さを感じているそうです。また、記者として重要なプレスリリースを見落とさずに正しく伝えていくことの重要性を、最後にお話しして頂きました。

合田さんの話題提供に続いて、質疑応答とディスカッションが行われました。記事にする基準や、記事にする際の課題について、また記者として必要な能力や責任感について、会場からは多くの質問があり、活発な議論が行われました。

文：福田 奈那美（理学研究科 博士前期課程 1 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員



第 45 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策 #1 日本の原子力政策史
- ゲスト：上川 龍之進（大阪大学大学院法学研究科 教授）
- 日時：2018 年 12 月 20 日（木）14:40～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 C
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2018 年 12 月 20 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階セミナー室 C にて、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策」の第 1 回「日本の原子力政策史」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。この研究会には、授業の受講生 2 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など計 9 人が参加しました。

今回は大阪大学大学院法学研究科の上川龍之進教授をお招きしました。上川先生は金融政策や金融行政がご専門でしたが、日本学術会議の東日本大震災学術調査をきっかけとして、原子力政策についても研究を進めていらっしゃいます。今回の研究会では、利害が複雑に絡み合う原子力政策を理解するために、2011 年 3 月 11 日以降の政権の動きや政策策定の流れについて、詳しくご紹介いただきました。

研究会の後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは様々な質問が出されました。終了後には「原子力政策の現在の実態について、専門家や国民世論の政策への影響について、そもそも専門家とは何かということについて、文字通り複雑な利害関係や方向性の確立について、など、アプローチの方法が難しい問題であることが分かった」といった感想が寄せられました（*アンケート用紙に記入された文章を多少修正して掲載しています）。



第 46 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策 #2 日本の科学技術イノベーション政策
- ゲスト：中澤 恵太（文部科学省 科学技術・学術政策局 企画評価課 政策科学推進室長・企画官）
- 日時：2019 年 1 月 10 日（木）14:40～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 C
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 1 月 10 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階セミナー室 C にて、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策」の第 2 回「日本の科学技術イノベーション政策」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。この研究会には、授業の受講生 2 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など計 11 人が参加しました。

今回は文部科学省の中澤恵太さんをお招きしました。研究会では今の日本の研究力についての現状や課題、科学技術イノベーション政策の概略、文部科学省内での具体的な政策立案について、実際に中澤さんご自身が行われてきた大学発ベンチャーに関する施策におけるご経験も交えてお話し頂きました。

研究会の後半では、質疑応答とディスカッションを行いました。参加していた学生から、これまでの研究の中で感じてきた科学技術政策への疑問が投げかけられると、中澤さんはご自身の経験も踏まえて丁寧にこたえてくださり、活発な質疑応答の時間となりました。また、「日本の科学技術政策は、雇用の不安定さや少子化とも関連する複雑な問題だと感じた」「少子高齢化は日本の変化の一大チャンスにならないだろうか」といった感想やコメントが寄せられました。



第 47 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ Between Documentaries and Science #1 “Documentary as Research: Communication for Change and Impact”
- ゲスト：Citt Williams (independent film maker)
- 日時：2019 年 1 月 15 日 (火) 13:00～14:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ)
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 1 月 15 日 (火) に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ) にて、科学技術に関するドキュメンタリーの制作過程について、制作者の方の談話から学ぶシリーズ“Between Documentaries and Science”の第 1 回を開催しました (特別講義「Effectively Communicating Your Science and Research」の一環として開催)。授業の受講生 3 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など 9 人、計 12 人が参加しました。

今回のゲストは、オーストラリアからいらっしゃった Citt Williams さんです。Williams さんは、気候変動をテーマとしたドキュメンタリー映像を、既存のものとは異なる新たな手法を用いて作成することに取り組まれています。Williams さんは、ドキュメンタリーの中で自然科学やデータの側面から取り扱われることの多い気候変動を、地域に暮らす人々の目線から捉え直そうとしています。そのために、地域に固有の言葉や言い伝え、人々の感じる色や音といった自然の様々な側面に目を向けます。こうして、人びとの感性にも響くような気候変動についてのドキュメンタリーを作成する方法を模索しています。

研究会では、Williams さんが実際に現在制作中の気候変動をテーマとしたドキュメンタリー映像も紹介して頂きながら、ドキュメンタリーの果たす役割や可能性についてお話して頂きました。

お話の後には、参加者から様々な質問やコメントが寄せられ、活発なディスカッションが行われました。



第 48 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ Between Documentaries and Science #2 “Seeing is Believing: Successful collaborations between Scientists and Film-makers”
- ゲスト：Luis Patron (documentary film maker)
- 日時：2019 年 1 月 29 日 (火) 13:00～14:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ)
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 1 月 29 日 (火) に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育総合棟 I 3 階 341 号室 (CO デザインスタジオ) にて、科学技術に関するドキュメンタリー制作過程について、制作者の方の談話から学ぶシリーズ“Between Documentaries and Science”の第 2 回を開催しました (特別講義「Effectively Communicating Your Science and Research」の一環として開催)。授業の受講生 3 人に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など 12 人、計 15 人が参加しました。

今回のゲストは、日本を拠点にドキュメンタリーを制作されている Luis Patron さんです。Patron さんは、国連大学や NHK World など、世界各地に視聴者を持つメディアにドキュメンタリーを提供されています。

研究会では、いくつかのドキュメンタリー映像を比較しながら、誰もが手軽に映像を世界中の人に発信できるようになった現代社会において、科学者とともにドキュメンタリー映像を制作することの意義について考えました。

参加者からは、科学者や研究者が上手に伝えられるようにするにはどうしたら良いのか、という点に関する質問が多く寄せられ、実践的な関心の高さがうかがえ、活発なディスカッションが行われました。



🍷 その他

CO デザインカフェ「異分野とつながる、社会とつながるために」

- タイトル：異分野とつながる、社会とつながるために
- カフェマスター：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）、他
- 日時：2018 年 4 月 17 日（火）12:10～12:50
- 場所：大阪大学全学教育総合棟 I 3 階 341 号室（CO デザインスタジオ）
- 主催：大阪大学 CO デザインセンター
- プログラム提供：副専攻プログラム/高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」

カフェマスターは、八木絵香さん（CO デザインセンター 准教授）のほか、副専攻プログラム/高度副プログラム「STiPS（公共圏における科学技術政策）」に関わる CO デザインセンターの教員たちでした。テーマは「異分野とつながる、社会とつながるために」。

学生さん 2 人に加えて、CO デザインセンターの関係者 9 人が参加しました。遊びに来てくれた学生さんは、それぞれ法学と臨床哲学を専攻されているとのことでした。

今回の CO デザインカフェは、「マトリクス自己紹介」風に、「公共圏における科学技術政策」の活動や教員の紹介を試みよう！ということで、さまざまな単語が書かれたスライドが映し出されました。

スライドに並んだ 30 あまりの単語は、「公共圏における科学技術政策」のプログラムや 教員に何かしら関連のあるもの。研究に関わる単語もあれば、プライベートに関わりの深い単語もあります。参加者に気になる単語をあげてもらい、その単語に関係のある教員が、その単語を出した理由を説明していききました。

たとえば「自動運転」ではこんな話が。先日も話題になったように、自動運転をしている車が人身事故を起こしたときにどうするのか。新しい技術が開発されて、どんどん日常生活に入り込んでくるのに法の整備が追いついていないのが現状です。

このように、新しい科学技術と社会について、今後どうすべきかを考えていくのがこのプログラムのねらいのひとつでもあります。

ほかにも、意見の対立する人たちが顔をあわせて議論をするためのしかけや、その意義などについても説明がありました。

それぞれの教員の体験談を交えた説明が具体的だったこともあり、説明する人だけでなく、参加者みんなでわいわいと会話が進んでいきました。



シンポジウム「Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience」

- タイトル：Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience
- 日時：2018 年 11 月 2 日（金）13:00-17:00
- 場所：Osaka Innovation Hub（大阪イノベーションハブ）
- 主催：オーストラリア国立大学、豪日交流基金、オーストラリア大使館、大阪大学 CO デザインセンター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：Osaka Innovation Hub（大阪イノベーションハブ）

2018 年 11 月 2 日（金）、シンポジウム「Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience」を実施しました。日豪両国から 44 人（登壇者やスタッフなどを含む）が参加しました。

前半のセッションのテーマは、「Responsible Research and Innovation（責任ある研究・イノベーション：RRI）」で、日豪両国から 3 人のパネリストが登壇しました。

・登壇者

Professor Matt James, College of Engineering and Computer Science, The Australian National University

Professor Hideyuki Hirakawa, Center for the Study of Co* Design, Osaka University

Associate Professor Sujatha Raman, Australian National Centre for the Public Awareness of Science, The Australian National University



後半のセッションのテーマは、「Liveability and Resilience（住みやすさとしなやかさ）」で、4 人のパネリストが登壇しました。

・登壇者

Professor Tim Colmer, Faculty of Science, University of Western Australia

Professor Masakazu Sugiyama, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo

Professor Brendan Barrett, Center for the Study of Co* Design, Osaka University

Professor Barbara Norman, Canberra Urban and Regional Futures, University of Canberra

イベント終了後も参加者同士で積極的に議論する様子が見られ、本イベントを通じて“住みやすく、しなやかな社会の在り方”について非常に有意義な意見交換ができました。

【共催イベント】市民参加型ワークショップ「自動運転のある暮らし：誰もおいていかない移動のデザインとその倫理」

- タイトル：市民参加型ワークショップ「自動運転のある暮らし：誰もおいていかない移動のデザインとその倫理」
- 日時：2018 年 12 月 9 日（日）13:30～16:30
- 場所：京都府立京都学・歴彩館 1 階小ホール
- 主催：日本生命倫理学会
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2018 年 12 月 9 日（日）、京都府立京都学・歴彩館において、市民参加型ワークショップ「自動運転のある暮らし：誰もおいていかない移動のデザインとその倫理」を開催しました。今回のワークショップは、日本生命倫理学会第 30 回年次大会の開催期間中に、大会関連企画としてバイオエシックス・カフェという名称で実施されました。

この日の一般参加者は 20 人で、5 つのグループに分かれて議論を進めました。今回のワークショップの流れは次の通りです。

13:30- ワークショップ開始、みんなで考えてみる時間

14:30- 休憩

14:40- ゲストからのコメント

15:00- もう一度みんなで考えてみる時間

16:10- まとめ

16:30 ワークショップ終了



全体進行は、山崎吾郎さん（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）が、また、それぞれのグループでのファシリテータは、STiPS の履修生たち 8 人がつとめました。履修生たちは授業などでの経験を踏まえ、グループでの議論を促したり、議論の内容を整理して発表するなど、ワークショップの現場で活躍しました。

【共催イベント】第2回仙北インパクトチャレンジ

- タイトル：第2回仙北インパクトチャレンジ
- 日時：2018年11月28日（水）10:00-17:00
- 場所：あきた芸術村 温泉ゆぽぽ 本館
- 主催：仙北インパクトチャレンジ実行委員会
- 共催：京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット

仙北インパクトチャレンジは、IoT/AIなどの最新技術を活用した地域事業活性化、地域経済圏振興を目的とした近未来技術活用事業の見本市です。2016年に国家戦略特区として仙北市が選定され、IoT/AIなどを活用した実証事業を数多く行ってきた経緯から取り組みが始まり、今回は第2回目でした。共催団体として、シンポジウムやサイエンスカフェを担当し、自治体が保有する健康情報を社会へ還元する取り組みや今後の医療に関して参加者の方々から貴重なご意見をいただきました。

■ 担当したプログラムの内容

13:30-14:00 シンポジウム「健診情報の可視化と地域への還元の未来」

テーマ：学校健診・母子保健情報のデータベース化とその利活用について

登壇者：川上 浩司（京都大学医学研究科・教授/京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット・ユニット長）

14:10-15:30 サイエンスカフェ「健康情報の活用と住民サービス」

仙北市在住の子育て中のお母さん・お父さん、仙北市役所職員の方にご参加いただきました。

自治体が保有する健康情報を個人だけでなく社会に還元する取り組みについて、その意義や有効性からこれからの医療のあり方までディスカッションが及びました。



5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

2016年度から、個別政策課題解決を目指した、拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）を実施してきました。本拠点 STiPS は、大阪大学メンバーを中心としたプロジェクトと京都大学メンバーを中心としたプロジェクト、それぞれを進めました。ここでは、それぞれの取り組みをご紹介します。

阪大拠点プロジェクト

プロジェクト名

新しい科学技術の社会的課題検討のための政策立案支援システムの構築

Developing a Support System for Addressing the Social Impacts of Emerging STI

プロジェクト実施機関

代表拠点：大阪大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、京都大学、九州大学

プロジェクト期間

2016（H28）年4月～2019（H31）年3月

2018年度プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
- ・渡邊 浩崇（大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授）
- ・工藤 充（大阪大学 CO デザインセンター 特任講師）
- ・水町 衣里（大阪大学 CO デザインセンター 特任助教）
- ・鍛冶 一郎（大阪大学 CO デザインセンター 特任研究員）
- ・岸本 充生（大阪大学データビリティフロンティア機構 教授）
- ・小山田 耕二（京都大学学術情報メディアセンター 教授）
- ・小林 俊哉（九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授）
- ・城山 英明（東京大学公共政策大学院 教授）

プロジェクト概要

新しい科学技術の普及は、恩恵とともに様々な問題も社会にもたらします。研究開発の成果が円滑に社会に受容され、便益が最大化されるためには、対処すべき問題や実現されるべき価値・ニーズなどの社会的課題を研究開発の早い段階から漸次的に特定・検討し、政策立案や制度設計、研究プログラムの策定に効果的に反映することが望まれています。そこで本プロジェクトでは、新規科学技術の社会的課題が政策立案等で的確に検討・反映されるのを促進する「社会的課題検討のための政策立案支援システム（ツール）」を構築することを目指します。

具体的な内容

2016 年度

- (1) 政策立案支援システム設計に資する過去事例の集積・分析
- (2) 政策立案支援システムに対する現場ニーズの特定
- (3) 政策立案支援システムの基本設計の検討

2017 年度

- (4) 政策立案支援システムの検討・改善
- (5) 政策立案ワークショップの設計と試行
- (6) 開催したワークショップに関する研究評価会の開催

2018 年度

- (7) 政策立案ワークショップの設計と試行
- (8) 対話ツールの制作
- (9) 政策立案支援システムの完成

2018 年度の主たる研究成果

2018 年度は本プロジェクトの取りまとめを行いました。特に、政策立案支援システムを、「課題探索マトリックス (A)」、「対話ツール (B)」、「政策立案ワークショップ (C)」の 3 つのツールと、政策実務者・研究者（とくに ELSI 専門家）・一般市民などからなる「政策立案ネットワーク (D)」から構成されるものとして整理しました。その上で、これら A から D の 4 つを、具体的な政策テーマ（2016 年度：超スマート社会に関連した科学技術、2017 年度：宇宙政策、2018 年度：ゲノム）に適用することを通じて、段階的に研究開発を進めてきました。

具体的には、2018 年度は、デュアルユースと自動運転を扱った「対話ツール」を開発し、宇宙政策とゲノムを扱った「政策立案ワークショップ」を開催し、政策立案過程において社会的課題（=ELSI）について多角的に検討するための方法論を発展させました。

開催した政策立案ワークショップは以下の通り。

- ・政策立案ワークショップ（宇宙）一般市民向け
2018 年 5 月 19 日（土）@UMEDAI 大阪・梅田会議室
- ・政策立案ワークショップ（ゲノム）政策実務者・研究者向け
2018 年 9 月 21 日（金）@エキスパート倶楽部
2018 年 11 月 16 日（金）@エキスパート倶楽部
2019 年 1 月 26 日（土）@UMEDAI 大阪・梅田会議室

成果に係る発表及び報道（2019 年度）

1) 2017-2018 年度の成果を報告書にまとめました。

STiPS (2018), 『2017～2018 年度 政策立案ワークショップ（宇宙）の記録』

京大拠点プロジェクト

プロジェクト名

自治体の持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築

Visualizing the Health Information Held by Local Governments for the Policy Development Considering Associated Ethical and Regulatory Issues

プロジェクト実施機関

代表拠点：京都大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、大阪大学

プロジェクト期間

2016（H28）年4月～2019（H31）年3月

2018年度プロジェクトメンバー

- ・川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）*研究代表者
- ・森田 朗（政策研究大学院大学 客員教授／SciREX センターPM, 国立社会保障問題研究 前所長／津田塾大学総合政策学部 教授）
- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- ・柴山 創太郎（Lund University, School of Economics and Management Senior Lecturer）
- ・吉田 都美（京都大学大学院医学研究科 特定助教）
- ・井出 和希（京都大学学際融合教育研究推進センター／京都大学大学院医学研究科 特定助教）

プロジェクト概要

ライフコースデータの構築に向けた学校健診情報のデータベース化とそれに伴う倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Implications; ELSI）へのアプローチにより市民・社会との相互理解を形成し、健康情報の利活用に向けた基盤を構築することを目的としています。

学校健診情報の電子化及び収集・活用することのできる基盤が形成され、ライフコースデータの構築やデータを活用した持続可能な健康・医療政策への第一歩となることが期待されます。小児期のBMIなどの健康状態は成人期の疾患リスクの予測につながることも報告されており、将来的な疾患の予防を通して健康水準の向上に寄与するだけでなく、成果は健康・医療政策の立案における重要な基礎資料として活用可能であるという意義があると考えています。

具体的な内容

- (1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化
- (2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化
- (3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

2018 年度の主たる研究成果

(1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化

2017 年度より引き続き、連携自治体の書面承諾を得て独自開発のソフトを用いたデータベース化を推進しています。2019 年 3 月時点で 121 自治体と取組を開始しています（図 1）。データベース化については、一次・二次利用に対応できるよう手順を確立し、進めています（図 2）。



図1. 全国の連携自治体(赤点)

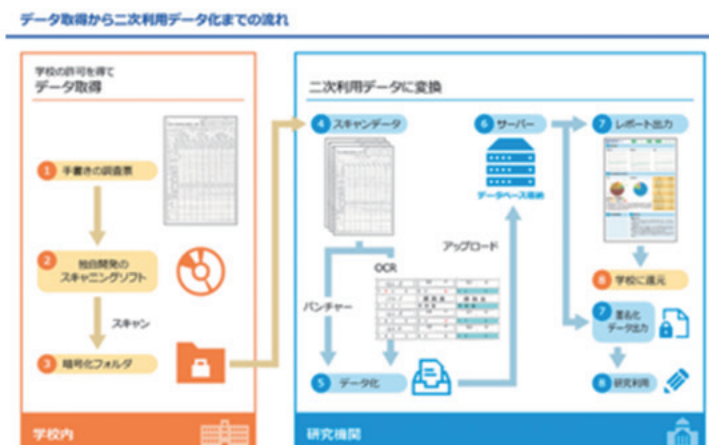


図2. データベース化の手順

(2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化

生徒個人の健康レポート及び自治体向けの集計レポートを作成しました。作成後は、参加自治体の学校を介して生徒個人に無償で還元し、併せて、自治体担当者を介して集計レポートを還元しました（図 3 及び図 4）



図 3. 個人向け健康レポート



図 4. 自治体向け集計レポート

(3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

連携 17 自治体の保護者 7495 名を対象とした本事業に対する理解や認識の調査を遂行しました。3871 名が回答し、46.8%の保護者の子供の健康への関心が向上し、情報を接続した解析についても約 69.5%の保護者の理解を示していることを確認しました。

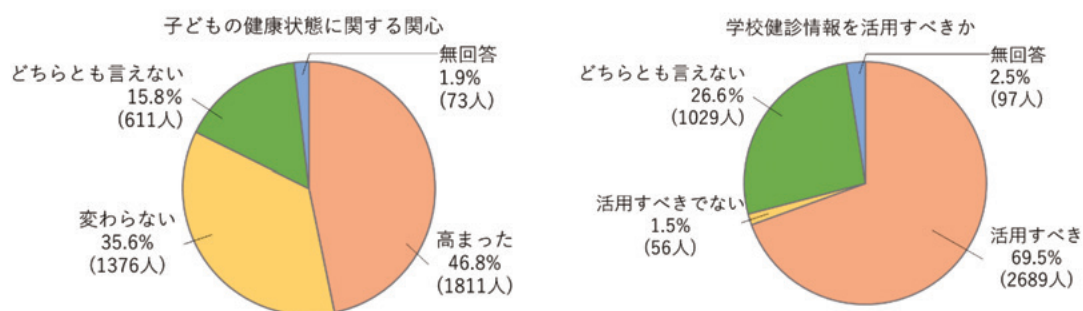


図 5. アンケート調査の結果（一部抜粋）

成果に係る発表及び報道

- 1) 2018 年 8 月に本プロジェクトの紹介及び連携自治体における取り組みについて、第 32 回自治体学会（青森大会）研究発表セッションにて発表しました。
- 2) 2018 年 9 月 22 日に京都大学アカデミックデイ 2018 にて本プロジェクトの紹介についてのアウトリーチを図りました。
- 3) 2018 年 11 月 28 日に第 2 回仙北インパクトチャレンジにて本プロジェクトの紹介についてのアウトリーチを図りました。
- 4) 2019 年 2 月 22 日に第 28 回 KYOTO オープンサイエンス・ミートアップにて本プロジェクトの紹介についてのアウトリーチを図りました。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

本拠点 STiPS は、関西ネットワークの拡大を目的とした研究会やイベントを開催しています。2018年度は、前年度に引き続き、豊中市立千里公民館においてサイエンスカフェを開催し、大阪大学経営企画オフィス研究支援部門とともに学術政策セミナーを開催しました。

また、拠点間連携プロジェクトと連携して、宇宙分野およびゲノム分野における政策に係わる実務者等ネットワークの発展に努めています（詳細は「5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施」を参照）。加えて、STiPS が提供する科目と連動して、広義の意味での科学技術政策にかかわる実務者を招へいしての研究会を行ったり、生命倫理学会との共催で、市民参加型ワークショップ「自動運転のある暮らし：誰もおいていかない移動のデザインとその倫理」（於・京都府立京都学・歴彩館）を実施するなど、さらなるネットワークの発展に努めています（詳細は「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」を参照）。

🍷 サイエンスカフェ@千里公民館

サイエンスカフェ@千里公民館 第17回

- タイトル：ゲームで生活習慣病を防ぐ!? ～みせたくない自分を“仮想の自分”でみせるコミュニケーション手法が持つ力～
- 講師：上田 昌文（NPO 法人市民科学研究室 代表理事）
- 進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
- 日時：2018 年 12 月 18 日（火）10:00～12:00
- 場所：千里公民館 第1 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
- 定員：50 人程度
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 CO デザインセンター

千里公民館では、平成 24 (2012) 年度以降、様々なテーマのサイエンスカフェが開催されてきました。昨年 (2017 年度からは、STiPS も一緒に開催させていただいています)。第 17 回は上田 昌文さん (NPO 法人市民科学研究室 代表理事) をゲストとしてお招きし、市民科学研究室が開発した生活習慣病対策ゲーム「ネゴバト」を実際に体験してみました。参加者は 18 人 (大阪大学や豊中市の関係者を除く) で、千里公民館の近くにお住まいの方だけでなく、豊中市外から足を運んでくださった方もいました。

このゲームは、日々の生活でおこる「なかなか運動できない」「付き合いで断りにくい飲み会のお誘い」「甘いものやお菓子を食べ過ぎてしまう」など、生活習慣病に関わるさまざまな誘惑にどう対処するのかを、誘惑される側と誘惑する側にわかれて対戦 (対話) していきます。対話のなかで他の人がどのようなジレンマを感じ、どう対応しているのかを聞きながら、自身の状況を考えることができます。ゲームに慣れてくるにつれて、グループ内でのやりとりは盛り上がっていきました。とくに実際の経験や習慣にもとづいた誘惑が語られはじめると、「なるほど。そういう理由もあるのか」「そういう状況だったら断れないかも」など、考えがゆらぐ人も出てきます。

ゲームが一通り終了したところで、上田さんからゲームの中のしかけや意図などが紹介されると、参加者からは「この結果をみると、たしかに自分は付き合いを優先させて不健康な選択をしているかも」といった声や、「他の人の健康に関する習慣や考え方を聞いたのが参考になった」、「新入社員ではない年代を想定した質問があっても面白そう」などの感想があがりました。

サイエンスカフェ終了後の感想としては、「参加型、実体験、疑似体験型がおもしろい」「ゲームで思考や習慣に気づくのがおもしろい」「町内の老人の集まりで使えそう」「これまで他人と健康習慣について話したことがなかったので話すきっかけに使えないかと思う」などがありました。



サイエンスカフェ@千里公民館 第18回

- タイトル：ようこそ iPS 細胞の世界へ！—「幹細胞かるた」で考えてみよう
- 講師：和田濱裕之さん（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）国際広報室 特定研究員）
川上雅弘さん（奈良先端科学技術大学院大学教育推進機構 特任准教授）
- 進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
- 日時：2019 年 1 月 8 日（火）10:00～12:00
- 場所：千里公民館 第1講座室（千里文化センター「コラボ」内）
- 定員：50 人程度
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 CO デザインセンター

この日は、和田濱裕之さん（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）国際広報室 特定研究員）と、川上雅弘さん（奈良先端科学技術大学院大学 教育推進機構 特任准教授）をゲストとしてお招きしました。前半は京都大学 iPS 細胞研究所がつくった「幹細胞かるた」を楽しみ、後半はかるたに登場した言葉などを手がかりにしながら、幹細胞や未来の医療について理解を深める時間でした。

かるた遊びが始まると、子どもだけでなく大人も思わず真剣になって札を探していました。札を取りながら、イラストや札に書かれた文字について「何の絵なのかな？」「どういう意味なんだろう？」など、わいわいと話し合うグループもありました。



かるた遊びが一通り終わったところで、グループごとに絵札や読み札の中から「このトピックについてもっと聞きたい」「なんだか気になる」という札を1-2枚選んでもらいました。この札を手にしながらか、ゲストへの質問が始まります。6才の参加者からの「iPS 細胞、ES 細胞って何ですか？」というストレートな質問も。ひとつ質問が出ると、「じゃあ、これはどうなの？」と別のところから声があがるなど、iPS 細胞へのみなさんの関心の高さがうかがえました。

iPS 細胞についてだけではなく、科学技術の発展とその先に続く社会のこと、新しい科学技術との向き合い方にかかわる話題なども出ていました。

サイエンスカフェ終了後の感想としては、「かるたでやってみると、言葉の難しさとは裏腹に身近に感じられました」「iPS 細胞は、まだまだこれから研究が始まっていくものということが分かった」「人間の寿命と倫理の兼ね合いが印象に残った」などがありました。

* 台風で中止になった第16回と同内容のものを第18回として実施

🍷 学術政策セミナー

第10回学術政策セミナー –研究力を引き出すために–

- タイトル：大学職員の知恵と力を生かすしかけ
- 講演者：小澤 みどり（東京大学国際高等研究所 ニューロインテリジェンス国際研究機構 副事務長）、高田 則明（大阪大学共創推進部長）
- 日時：2019年3月1日（金）14:00-16:00
- 場所：大阪大学吹田キャンパス 共創イノベーション棟2階 会議室
- 主催：大阪大学経営企画オフィス研究支援部門
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2004年の国立大学法人化以降、国立大学の状況は変化し続けています。このような中で、大学の研究力をゆたかにするためには、大学の構成員一人ひとりが何をすべきか、何ができるかを考え、知恵や力を生かすことが求められています。

本セミナーでは、大学職員として研究環境構築や大学を支援する組織体制の改革を推進してきた事例紹介に基づき、大学の研究環境をゆたかにするために一人ひとりができることを考える機会を提供します。まず、【話題提供1】では、研究者活躍の推進に向けた取り組みに関して、事務の立場から行ってきた具体的な体験や課題を、大型研究拠点形成プロジェクト（WPI）支援の事例をもとに紹介していただきます。次に、【話題提供2】では、大学における研究力に対する捉え方の変化を、法人化以前から始まり最近の状況まで、大学本部の事務機構における業務を通じた具体的な体験をまじえながら紹介いただき、さらに今後の指針をうかがいます。その後の全体討論では、それぞれの立場から議論を行います。（告知文より）

学術政策セミナー –研究力を引き出すために– 第10回「大学職員の知恵と力を生かすしかけ」

2019年3月1日（金）14時-16時

大阪大学吹田キャンパス 共創イノベーション棟2階会議室

2004年の国立大学法人化以降、国立大学の状況は変化し続けています。このような中で、大学の研究力をゆたかにするためには、大学の構成員一人ひとりが何をすべきか、何ができるかを考え、知恵や力を生かすことが求められています。

本セミナーでは、大学職員として研究環境構築や大学を支援する組織体制の改革を推進してきた事例紹介に基づき、大学の研究環境をゆたかにするために一人ひとりができることを考える機会を提供します。まず、【話題提供1】では、研究者活躍の推進に向けた取り組みに関して、事務の立場から行ってきた具体的な体験や課題を、大型研究拠点形成プロジェクト（WPI）支援の事例をもとに紹介していただきます。次に、【話題提供2】では、大学における研究力に対する捉え方の変化を、法人化以前から始まり最近の状況まで、大学本部の事務機構における業務を通じた具体的な体験をまじえながら紹介いただき、さらに今後の指針をうかがいます。その後の全体討論では、それぞれの立場から議論を行います。

対 象

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁等の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。

プログラム

14:00	開会挨拶
14:05	話題提供1 「壁を乗り越える力ー外国人研究者天國を作るにはー」 小澤 みどり 氏（東京大学国際高等研究所 ニューロインテリジェンス国際研究機構 副事務長）
14:55	話題提供2 「研究力強化に不可欠なものー教職協働と振興する職員の力ー」 高田 則明 氏（大阪大学共創推進部長）
15:45	全体討論
16:00	閉会

参加申込

・ <http://osaku.jp/y0409> からお申し込みください。
（大阪大学職員研修の場合は該当項目にYesと回答願います）
※定員（60名）を超えた場合、会場の都合上、先着順とさせていただきます。

お問合せ

大阪大学経営企画オフィス研究支援部門（担当：伊藤・尾黒）
メール：seminar@frcp.osaka-u.ac.jp
ウェブサイト：<http://osaku.jp/y0409>

主催：大阪大学経営企画オフィス研究支援部門
共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大阪大学 OPEN 2021



第 11 回学術政策セミナー ―研究力を引き出すために―

- タイトル：エビデンスに基づく政策立案を考える～大学の研究や教育の推進を事例として～
- 講演者：大竹 文雄（大阪大学大学院経済学研究科 教授）、齊藤 貴浩（大阪大学経営企画オフィス 教授）
- 日時：2019 年 3 月 8 日（金）14:00-16:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 管理・講義 A 棟 A212（HALC1）
- 主催：大阪大学経営企画オフィス研究支援部門
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

昨今、エビデンスに基づく政策立案(Evidence-based policy making; EBPM) の取組が強化されています。より効果的・効率的に施策の企画立案を進めるため、また一般の人々や関係者に対する説明責任（アカウンタビリティ）を果たすためにも、客観的な根拠を重視し、定量的なデータに基づいて意思決定を行うことが加速すると予想されています。

本セミナーでは、大学の研究や教育の推進におけるデータの活用を事例として、EBPM を日常の職務で生かすために必要となる発想や知識を身につける機会を提供します。まず、【話題提供 1】では、EBPM の概要や実際のエビデンスの政策立案への活用例、そしてデータを用いた具体的な事例を紹介していただきます。次に、【話題提供 2】では、教育におけるエビデンスとアカウンタビリティ、現場における課題や今後の指針などをうかがいます。その後の全体討論では、それぞれの立場から議論を行います。（告知文より）

学術政策セミナー ―研究力を引き出すために―
第11回「エビデンスに基づく政策立案を考える
～大学の研究や教育の推進を事例として～」

2019年3月8日（金） 14時-16時
大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 管理・講義A棟 A212（HALC1）

昨今、エビデンスに基づく政策立案(Evidence-based policy making: EBPM) の取組が強化されています。より効果的・効率的に施策の企画立案を進めるため、また一般の人々や関係者に対する説明責任（アカウンタビリティ）を果たすためにも、客観的な根拠を重視し、定量的なデータに基づいて意思決定を行うことが加速すると予想されています。

本セミナーでは、大学の研究や教育の推進におけるデータの活用を事例として、EBPM の概要や実際のエビデンスの政策立案への活用例、そしてデータを用いた具体的な事例を紹介していただきます。次に、【話題提供 2】では、教育におけるエビデンスとアカウンタビリティ、現場における課題や今後の指針などをうかがいます。その後の全体討論では、それぞれの立場から議論を行います。

対 象
 本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁等の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学教職員としてもご参加いただけます。

プログラム

14:00	開会挨拶
14:05	話題提供1 「EBPMを教育で実践するには」 大竹 文雄 氏（大阪大学経済学研究科 教授）
14:55	話題提供2 「プログラムをより良くするためのエビデンスと評価の役割」 齊藤 貴浩 氏（大阪大学経営企画オフィス 教授）
15:45	全体討論
16:00	閉会

参加申込
 ・ <http://osaku.jp/y0304> からお申し込みください。
 （大阪大学教職員研修の場合は該当項目にVeaと回答願います）
 ※定員（60名）を超えた場合、会場の都合上、先着順とさせていただきます。

お問合せ
 大阪大学経営企画オフィス研究支援部門（担当：伊藤・尾崎）
 メール: seminar@terp.osaka-u.ac.jp
 ウェブサイト: <http://osaku.jp/y0304>

主催：大阪大学経営企画オフィス研究支援部門
 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2018 年度には、以下の活動を行うことができました。

I) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟

米国アリゾナ州立大学が構築した「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に関する国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」に、本拠点 STiPS は、2014 年 6 月から加盟しており、2018 年度も連携を継続しました。

II) InSPIRES プロジェクト アドバイザリーボードへ参加

欧州連合 (EU) のイノベーション推進施策である Horizon2020 の下で行われている公共的関与のプロジェクト「Ingenious Science shops to promote Participatory Innovation, Research and Equity in Science (InSPIRES)」にアドバイザリーボードの一員として参加しています。この一環として、ニュージーランド・オタゴ大学にて 2018 年 4 月 3 日～6 日に開催された国際会議「15th International Public Communication of Science and Technology Conference (PCST 2018)」にて、「Science communication the other way around: how to get scientists to understand you」と題したラウンドテーブルの企画・実施を行いました。

III) 豪州国立大学と合同でシンポジウムを開催

豪州国立大学および大阪大学 CO デザインセンターと合同で、2018 年 11 月 2 日、大阪イノベーションハブにおいて、シンポジウム「Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience (日豪の科学技術外交：住みやすく、しなやかな社会の在り方を探る)」を主催し、エビデンスに基づく科学技術外交政策・公共政策の発展を促す方策について議論しました。また、豪州国立大学の Australian National Centre for the Public Awareness of Science の研究者らと、今後の教育・研究面での連携に向けた議論も行いました。詳細は p.59 参照。

海外調査及び発表等

2018 年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2018 年 4 月 3 日～6 日

工藤充 (大阪大学 特任講師) は、ニュージーランド・オタゴ大学にて開催された国際会議「15th International Public Communication of Science and Technology Conference (PCST 2018)」にて、STiPS

の教育プログラムについての口頭発表を行い、各国からの参加者と科学コミュニケーション研究・教育についての情報交換・議論を行いました。

2018年2月26日～3月7日

渡邊浩崇（大阪大学 特任准教授）と鍛冶一郎（大阪大学 特任研究員）が、宇宙政策や科学技術政策に関する教育・研究の打ち合わせ及び資料・情報収集を目的として、米国を訪問しました。カンザスシティにおいてアイゼンハワー大統領図書館とトルーマン大統領図書館、ワシントン DC において国立公文書館とジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所（Institute for International Science & Technology Policy）・宇宙政策研究所（Space Policy Institute）を訪問し、資料・情報収集を行うとともに、今後の教育・研究における協力可能性等について意見交換を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2018 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 28 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

小林傳司. 2019. 「IV 教養のススメ——〈役に立つ〉を超えて 人生、大学を出てからの方が長い」, 標葉靖子, 岡本佳子, 中村優希 編『東大キャリア教室で 1 年生に伝えている大切なこと—変化を生きる 13 の流儀』東京大学出版会, 2019 年 3 月. 寄稿

平川秀幸. 2018. 「第 2 章 2 区域外避難はいかに正当化されうるか—リスクの心理ならびに社会的観点からの考察」, 淡路剛久 監修 吉村良一, 下山憲治, 大坂恵里, 除本理史 編『原発事故被害回復の法と政策』日本評論社, 2018 年 6 月. 著書

平川秀幸. 2018. 「福島第一原発事故の後始末と公論形成——公論形成の前に考えるべきこと」, 『環境と公害』, 48(2): 3-8. 2018 年 10 月. 寄稿

岸本充生. 2018. 「エマージング・リスクの早期発見と対応—公共政策の観点から—」, 『保険学雑誌』, 642: 37-60. 2018 年 9 月. 学術論文

岸本充生. 2018. 「規制影響評価（RIA）の活用に向けて：国際的な動向と日本の現状と課題」, 『経済系：関東学院大学経済学会研究論集』, 275: 26-44. 2018 年 11 月. 寄稿

岸本充生. 2018. 「リスクを巡る意思決定とレギュラトリーサイエンス」, 『日本 LCA 学会誌』, 14(4): 277-283. 2018 年 12 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「リスク学の発展と原子力技術の深い関係」, 『日本原子力学会誌』, 61(3): 185-187. 2019 年 3 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「環境規制における規制影響分析（RIA）の進展と課題：米国の石炭火力発電所規制を例に」, 『環境情報科学』, 48-1: 49-54. 2019 年 3 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「第 2 部 分野別の実用化動向」「第 3 部 海外の法規制及び社会動向」「第 4 部 国内動向と政策オプション」『科学技術に関する調査プロジェクト 2018 報告書生体認証技術の動向と活用』国立国会図書館 調査及び立法考査局, 2019 年 3 月. 著書

- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 情報化がもたらす変化 時代を根本から見つめ直せ」, 『朝日新聞』, 4月20日朝刊, 2018年4月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) はしかの流行で考える ワクチン接種の悩ましさ」, 『朝日新聞』, 5月18日朝刊, 2018年5月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) イノベーション政策 政府は「主導」より「対処」を」, 『朝日新聞』, 6月15日朝刊, 2018年6月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 世界の水問題 海外の水源に依存する日本」, 『朝日新聞』, 7月20日朝刊, 2018年7月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 災害多発、連鎖する影響 相互依存の社会、再点検を」, 『朝日新聞』, 9月21日朝刊, 2018年9月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 49日も逃走できた訳は 「もてなし」の心性に盲点?」, 『朝日新聞』, 10月19日朝刊, 2018年10月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 自己責任論の思想 「集団内の役割」問う日本」, 『朝日新聞』, 11月19日朝刊, 2018年11月. 寄稿
- 神里達博. 2018. 「(月刊安心新聞 plus) 失われた30年の正体 じりじり続けた撤退戦」, 『朝日新聞』, 12月14日朝刊, 2018年12月. 寄稿
- 神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 豚コレラ、26年ぶり国内で 人類が招いた生命系の混乱」, 『朝日新聞』, 1月18日朝刊, 2019年1月. 寄稿
- 神里達博. 2019. 『ブロックチェーンという世界革命 価値観を根本から変えるテクノロジーの正体とは』河出書房新社, 2019年1月. 著書
- 神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) ブロックチェーン 「信頼確保」に革命的技術」, 『朝日新聞』, 2月15日朝刊, 2019年2月. 寄稿
- 神里達博. 2019. 「科学と公共」, 『思想』, 2019年第3号(第1139号):101-121, 2019年2月. 依頼原稿
- 神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) テレビの地位相対化 この国の姿、変える要因に」, 『朝日新聞』, 3月21日朝刊, 2019年3月. 寄稿
- 辻田俊哉. 2018. 「世界有数のサイバーセキュリティ先進国」(ほか10章1コラム), 立山良司 編『イスラエルを知るための62章(第2版)』明石書店, 2018年6月. 著書
- Kudo M, Yoshizawa G, Kano K. 2018. “Engaging with policy practitioners to promote institutionalisation of public participation in science, technology and innovation policy,” *Journal of Science Communication* 17(04): N01. 2018年10月. 学術論文
- 水町衣里. 2018. 「生物や価値観の多様性を扱う教育プログラム『宇宙箱舟ワークショップ』の実践を通じて生態学と社会のつなぎ方を考える」, 『日本生態学会誌』, 68: 189-197. 2018年11月. 学術論文

学会発表等

- 岸本充生. 2018. 「2018 年の日本のリスクを俯瞰する（「今年のリスク」選定 TG 報告）」, 第 31 回日本リスク研究学会年次大会（福島市, コラッセふくしま）, 2018 年 11 月 10 日. 口頭発表
- 藤井健吉, 平井祐介, 井上知也, 河野真貴子, 小野恭子, 保高徹生, 岸本充生, 永井孝志, 村上道夫. 2018. 「レギュラトリーサイエンスタスクグループ活動報告：レギュラトリーサイエンスのもつ解決志向性とリスク学の親和性」, 第 31 回日本リスク研究学会年次大会（福島市, コラッセふくしま）, 2018 年 11 月 10 日. 口頭発表
- 八木絵香, 大橋智樹, 北村正晴. 2018. 「安全に関する Attitude の涵養を目的とした技術者教育プログラムの開発(1)－基本構想－」, 日本人間工学会第 59 回大会（仙台市, 宮城学院女子大学）, 2018 年 6 月 3 日. 口頭発表
- 八木絵香. 2018. 「空色の会—JR 福知山線事故・負傷者と家族等の会—取り組みの紹介」, 日本人間工学会第 59 回大会学会・大会共同企画シンポジウム「知のネットワークを生かす社会的レジリンス」（宮城学院女子大学）, 2018 年 6 月 3 日. 招待講演
- 八木絵香. 2018. 「立場や意見が異なる人々との対話の場づくり—その可能性と限界—」, 公開研究会「無作為抽出型の市民参加の可能性—地球規模リスクの問題への応用を考える—」（札幌市, 北海道大学情報教育館）, 2018 年 6 月 17 日. 口頭発表
- 八木絵香, 大橋智樹, 北村正晴. 2019. 「安全に関する Attitude の涵養を目的とした技術者教育プログラムの開発（1）－基本構想と原子力発電分野への適用－」, 日本原子力学会 2019 年春の大会（茨城大学 水戸キャンパス）, 2019 年 3 月 20 日. 口頭発表
- 渡邊浩崇. 2018. 「宇宙の歴史 3—宇宙政策史、宇宙法制史、宇宙科学技術史、宇宙産業史—」, 第 62 回宇宙科学技術連合講演会（久留米市, 久留米シティープラザ）, 2018 年 10 月 25 日. 企画・司会
- 渡邊浩崇. 2018. 「米国宇宙政策としてのアポロ計画—いくつかの論点の再検討—」, 第 62 回宇宙科学技術連合講演会（久留米市, 久留米シティープラザ）, 2018 年 10 月 25 日. 口頭発表
- 辻田俊哉. 2018. 「安全保障におけるレジリエンス構築の模索—イスラエルのサイバーセキュリティ政策を事例として」, 日本国際政治学会 2018 年度研究大会（さいたま市, 大宮ソニックシティ）, 2018 年 11 月 3 日. 口頭発表
- Toshiya Tsujita. 2019. “The Concept and Practice of Resilience Management: A Systems Thinking Approach to Asymmetric Security Challenges,” International Studies Association, 60th Annual Convention 2019, (Toronto, Canada), 2019 年 3 月 30 日. 口頭発表
- Kudo M, Mizumachi E, Yagi E. 2018. “A qualitative study of reflective accounts of a science communication training programme provided by its former trainees,” Public Communication of Science and Technology Conference 2018 (University of Otago, Dunedin, New Zealand), 2018 年 4 月 4 日. 口頭発表

- Ávila L T, Bagnoli F, Kudo M. 2018. “Science communication the other way around: how to get scientists to understand you?,” Public Communication of Science and Technology Conference 2018 (University of Otago, Dunedin, New Zealand), 2018 年 4 月 3 日. ワークショップ企画・運営
- Kano K, Mizumachi E, Shiose T, Takeuchi S. 2018. “Public engagement-oriented science education practices and research - using TV programs broadcasted by NHK in Japan,” Public Communication of Science and Technology Conference 2018 (University of Otago, Dunedin, New Zealand), 2018 年 4 月 6 日. 口頭発表.
- 加納圭, 水町衣里, 塩瀬隆之, 後藤崇志, 竹内慎一. 2018. 「『理科の見方・考え方』に着目した教育プログラムの開発とコンピュータ適応型テスト開発構想」, 日本科学教育学会第 42 回年会 (長野市, 信州大学長野 (教育) キャンパス), 2018 年 8 月 17 日. 口頭発表
- 竹内慎一, 加納圭, 水町衣里, 塩瀬隆之, 後藤崇志. 2018. 「理科教育番組と連動した科学イベントやワークショップの課題と今後の構想」, 日本科学教育学会第 42 回年会 (長野市, 信州大学長野 (教育) キャンパス), 2018 年 8 月 17 日. 口頭発表
- Kano K, Mizumachi E, Shiose T, Takeuchi S, Goto T. 2018. “Science communication practices and research on scientific mindset and learning motivation, using TV programs broadcasted by NHK,” 2018 Science & You International Conference on Science Communication (China National Convention Center, Beijing, China), 2018 年 9 月 16 日. 口頭発表.

社会活動 (講演会・展示会などアウトリーチ活動など)

- 小林傳司. 2018. パネリスト, 関西 7 大学フェスティバル 2018 in 東京 (駿台予備学校 お茶の水校), 2018 年 7 月 16 日.
- 小林傳司. 2018. パネリスト, 関西 7 大学フェスティバル 2018 in 名古屋 (河合塾 名古屋校), 2018 年 7 月 22 日.
- 小林傳司. 2018. コメンテーター, 公開シンポジウム「ハラスメントを鏡に、日本社会を検証する—なぜまっとうな議論ができないのか?」 (日本学術会議講堂), 2018 年 7 月 27 日.
- 小林傳司. 2018. 基調講演, 東京大学主催 主要大学説明会 2018 (大阪国際会議場グランキューブ大阪), 2018 年 8 月 26 日.
- 小林傳司. 2018. 講演, “Innovation and University Education: Experience from Japanese initiatives at Osaka towards a regionalization of innovation,” Diversities of Innovation III: The Specificities of innovation and Appropriate Areas of Development: Competences and Competition on Labour (Berlin), 2018 年 10 月 15 日.
- 小林傳司. 2018. 開会挨拶, COiRE 平成 30 年度公開シンポジウム「フューチャー・デザイン —持続可能な未来に向けて」 (大阪大学), 2018 年 11 月 7 日.

- 小林傳司. 2018. コメント掲載, 「月刊大学 11 月号: 阪大などが「適塾」」, 『読売新聞』, 11 月 8 日刊, 2018 年 11 月 8 日.
- 小林傳司. 2018. コメント, 日本学術会議哲学委員会主催公開シンポジウム「科学技術の進展と人間のアイデンティティ—哲学・倫理・思想・宗教研究からの問いかけ—」(日本学術会議講堂), 2018 年 11 月 23 日.
- 小林傳司. 2018. モデレーター, 大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科主催シンポジウム「AI ネットワーク時代に向けた法・政策の在り方」(大阪大学中之島センター), 2018 年 11 月 24 日.
- 小林傳司. 2018. 講演, 「教養教育の再構築に向けて」, 東京理科大学教養教育センターキックオフシンポジウム「教養とは何か」(東京理科大学), 2018 年 12 月 1 日.
- 小林傳司. 2018. 講演, 「大阪大学の教育改革」, 高大接続シンポジウム「高校における探究学習の未来～組織的展開と持続可能性を考える」(大阪大学), 2018 年 12 月 22 日.
- 小林傳司. 2019. 講演, 「科学でわかること、わからないこと—トランスサイエンス的状况について」, 電力中央研究所協力会社グループ研修(日本教育会館), 2019 年 1 月 18 日.
- 小林傳司. 2019. 講演, 「科学技術と社会をつなぐ—ELSI をめぐって」, 関西経済連合会評議員会(関西経済連合会), 2019 年 1 月 21 日.
- 小林傳司. 2019. パネリスト, 公開シンポジウム「Society 5.0 に向けた産学共創のあり方」(経団連会館), 2019 年 3 月 7 日.
- 平川秀幸. 2018. 放送大学教養学部科目「リスクコミュニケーションの現在('18)」開講
- 平川秀幸. 2018. コメンテーター, ワークショップ「宇宙政策の未来についてみんなで考える」(UMEDAI 大阪・梅田会議室), 2018 年 5 月 19 日.
- 平川秀幸. 2018. 「福島第一原発の後始末と公論形成～公論形成の前に考えるべきこと～」, 第 1 分科会「福島第一原発の後始末と脱原子力社会への転換」, 第 4 回「原発と人権」全国研究・交流集会 in ふくしま(福島大学), 2018 年 7 月 29 日.
- 平川秀幸. 2018. ゲスト, サイエンスカフェ「現代という時代における科学リテラシーの意義」(東京理科大学), 2018 年 9 月 13 日.
- 平川秀幸. 2018. 企画・司会, 政策立案ワークショップ(ゲノム)第 1 回(東京都, エキスパート倶楽部), 2018 年 9 月 21 日.
- 平川秀幸. 2018. 講師, 「ゲノム編集食品がやってくる—メリットと安全性の確保—」, 消費者力育成セミナー(大阪府立大学中百舌鳥キャンパス), 2018 年 10 月 15 日.
- 平川秀幸. 2018. "Significance of RRI: Japanese context", シンポジウム「Science & Technology Diplomacy and Responsible Research & Innovation for Liveability and Resilience」(大阪イノベーションハブ), 2018 年 11 月 2 日.
- 平川秀幸. 2018. 企画・司会, 政策立案ワークショップ(ゲノム)第 2 回(東京都, エキスパート倶楽部), 2018 年 11 月 26 日.

- 平川秀幸. 2019. 企画・司会, 政策立案ワークショップ (ゲノム) 研究評価会 (大阪府, UMEDAI 大阪・梅田会議室), 2019 年 1 月 26 日.
- 平川秀幸. 2019. コメント掲載, 「深刻さ欠ける放射線副読本」, 東京新聞, 2019 年 3 月 22 日.
- 平川秀幸. 2019. コメントとパネルディスカッション司会, 「ゲノム編集 食と農業の未来を考える (PART II)」 (大阪いずみ市民生協), 2019 年 3 月 26 日.
- 岸本充生. 2018. 講演. 「私たちは新しい技術にどう向き合ってきたか、どう向き合うべきか—安全とリスクの考え方—」, 市民シンポジウム「再生医療・遺伝子治療を考える～新しい医療をつくるために必要なこと～」 (東京都, 秋葉原 UDX), 2018 年 8 月 5 日.
- 岸本充生. 2018. 講演. 「原発差止めとリスク認知の関係—リスク学の観点から—」, 第 5 回 CIGS 原子力と法ワークショップ 「リスク認知と原子力発電所の差止め」 (東京都, キヤノングローバル戦略研究所), 2018 年 10 月 31 日.
- 岸本充生. 2018. 講演. 「私たちは新しい技術にどう向き合うべきか—安全とリスクの考え方—」, 市民シンポジウム「再生医療・遺伝子治療を考える～新しい医療を社会と創る～」 (新大阪ブリックビル), 2018 年 12 月 16 日.
- 岸本充生. 2018. 講演. 「超スマート社会におけるデータ利活用に向けた基礎知識」, イノベーションストリーム KANSAI (グランフロント大阪), 2018 年 12 月 18 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「データ活用のための規制と倫理」, データビリティフロンティア機構シンポジウム「阪大と始めるビッグデータ共創」 (グランフロント大阪), 2019 年 2 月 21 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「放射線安全のためのリスク評価とレギュラトリーサイエンス」, 平成 30 年度 放射線安全管理研修会」 (東京都, 文京シビックホール), 2019 年 2 月 25 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「わが国における今後の規制改革のあり方—規制影響分析 (RIA) の活用—」, 経団連 行政改革推進委員会 (東京都, 経団連会館), 2019 年 2 月 28 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「放射線安全のためのリスク評価とレギュラトリーサイエンス」, 平成 30 年度 放射線安全管理研修会」 (大阪科学技術センター), 2019 年 3 月 1 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「科学技術と社会のギャップを埋めるためのレギュラトリーサイエンス」, 第 12 回技術者倫理フォーラム～東日本大震災時の福島第二原子力発電所での経験を踏まえて～ (東京大学本郷キャンパス), 2019 年 3 月 8 日.
- 岸本充生. 2019. 講演. 「リスクのフレームを設定することの意義: 新しい技術にどう向き合うか」, 第 18 回日本再生医療学会総会 (神戸国際会議場), 2019 年 3 月 22 日.
- 神里達博. 2018. インタビュー掲載, 「〈新中世化〉状況での建築の可能性」, 『GA JAPAN』, 154, 2018 年 7 月.
- 八木絵香. 2018. カフェマスター (進行), CO デザインカフェ「異分野とつながる、社会とつながるために」 (大阪大学), 2018 年 4 月 17 日.

- 八木絵香. 2018. 企画・講師, 二頁だけの読書会『対話で創るこれからの「大学」』（「ナレッジキャピタル大学校」の一環として実施）（グランフロント大阪, ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター）, 2018 年 4 月 18 日.
- 八木絵香. 2018. 全体進行, ワークショップ「宇宙政策の未来についてみんなで考える」（UMEDAI 大阪・梅田会議室）, 2018 年 5 月 19 日.
- 八木絵香. 2018. 講師, 科学技術コミュニケーション演習「グループで意見をまとめる」, 静岡市立静岡科学館「静岡科学館科学コミュニケーター育成講座」（静岡科学館る・く・る）, 2018 年 7 月 1 日.
- 八木絵香. 2018. 口頭発表「ただ『加害者』の傍らにあるということー福島第一原子力発電所事故と JR 福知山線事故 2 つの事故の経験から」, KEI 報告書執筆者ワークショップ「福島原発事故の環境・社会影響と教訓」（フクラシア東京ステーション会議）, 2018 年 7 月 18 日.
- 八木絵香. 2018. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ！ー『幹細胞かるた』で考えてみよう」（豊中市立千里公民館）, 2018 年 9 月 4 日. * 台風のため中止
- 八木絵香. 2018. パネルディスカッションコーディネーター, 食の安全安心シンポジウム「ほんまはどやねん？『健康食品』～安全な選択をするために～」（大阪府庁新別館）, 2018 年 10 月 24 日.
- 八木絵香. 2018. 話題提供, 日本応用心理学会 公開シンポジウム 2018「自動運転が社会的に受け入れられるために」（立正大学 品川キャンパス）, 2018 年 12 月 15 日.
- 八木絵香. 2018. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「ゲームで生活習慣病を防ぐ!? ～みせたくない自分を“仮想の自分”でみせるコミュニケーション手法が持つ力～」（豊中市立千里公民館）, 2018 年 12 月 18 日.
- 八木絵香. 2018. コーディネーター, 滋賀県「リスクコミュニケーション研修会」（滋賀県危機管理センター）, 2018 年 12 月 25 日.
- 八木絵香. 2019. 企画・司会, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ！ー『幹細胞かるた』で考えてみよう」（豊中市立千里公民館）, 2019 年 1 月 8 日.
- 渡邊浩崇. 2018. コメント掲載, 「平成時代 日本人 宇宙への旅（上）ISS で信頼 先進国へ」, 『読売新聞』, 4 月 1 日朝刊, 2018 年 4 月 1 日.
- 渡邊浩崇. 2018. 企画・話題提供, ワークショップ「宇宙政策の未来についてみんなで考える」（UMEDAI 大阪・梅田会議室）, 2018 年 5 月 19 日.
- 辻田俊哉. 2018. 進行, 学生説明会 VIA（Volunteers in Asia）による短期海外教育プログラムによる短期海外教育プログラムーシリコンバレーなどで最先端のソーシャルイノベーションなどを体験！（大阪大学）, 2018 年 4 月 11 日.
- 辻田俊哉. 2018. 講演, Handai-Asahi 中之島塾「なぜ紛争は続くのか～中東和平問題から考える」（大阪大学中之島センター）, 2018 年 5 月 26 日.

- 辻田俊哉. 2018. 進行, シリーズ: ソーシャルデザイン「革新的なテクノロジーと途上国の人々のくつな
がり」を生み出す! コペルニクの活動と展開: デザイン思考とストーリーテリングの視点から」(大
阪大学), 2018 年 6 月 12 日.
- 工藤充. 2018. 企画, シンポジウム「Science & Technology Diplomacy and Responsible Research &
Innovation for Liveability and Resilience」(大阪イノベーションハブ), 2018 年 11 月 2 日.
- 工藤充. 2018. 企画, 市民参加型ワークショップ「自動運転のある暮らし: 誰もおいていかない移動のデ
ザインとその倫理」(京都府立京都学・歴彩館), 2018 年 12 月 9 日.
- 工藤充. 2018. 討論者, 第 8 回原子力政策・福島復興シンポジウム「東日本大震災と福島原発事故から 8
年〜未来世代から原子力バックエンド問題と福島復興を考える〜」(早稲田大学早稲田キャンパス),
2019 年 3 月 7 日.
- 水町衣里. 2018. 企画・講師, 二頁だけの読書会『対話で創るこれからの「大学」』(「ナレッジキャピ
タル大学校」の一環として実施)(グランフロント大阪, ナレッジキャピタル コングレコンベンション
センター), 2018 年 4 月 18 日.
- 水町衣里. 2018. 取材協力, 「定番のお出かけスポットでできる「学び」に役立つ”見方”」, 『こどもちゃ
れんじ じゃんぷ 通信』, 7 月号, 2018 年 7 月.
- 水町衣里. 2018. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ! —『幹細胞かるた』
で考えてみよう」(豊中市立千里公民館), 2018 年 9 月 4 日. * 台風のため中止
- 水町衣里. 2018. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ゲームで生活習慣病を防ぐ!? 〜みせたくない自
分を“仮想の自分”でみせるコミュニケーション手法が持つ力〜」(豊中市立千里公民館), 2018 年
12 月 18 日.
- 水町衣里. 2019. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ! —『幹細胞かるた』
で考えてみよう」(豊中市立千里公民館), 2019 年 1 月 8 日.
- 小林万里絵. 2018. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ! —『幹細胞かる
た』で考えてみよう」(豊中市立千里公民館), 2018 年 9 月 4 日. * 台風のため中止
- 小林万里絵. 2018. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ゲームで生活習慣病を防ぐ!? 〜みせたくない
自分を“仮想の自分”でみせるコミュニケーション手法が持つ力〜」(豊中市立千里公民館), 2018
年 12 月 18 日.
- 小林万里絵. 2019. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「ようこそ iPS 細胞の世界へ! —『幹細胞かる
た』で考えてみよう」(豊中市立千里公民館), 2019 年 1 月 8 日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- 川上浩司. 2018. 「データベース研究で用いられる Real World Data の種類と特徴（川上浩司監修：特集 Real World Data（実臨床データ）を用いた臨床疫学研究）」, 『医学のあゆみ』, 265(11):919-924, 2018 年. 寄稿
- 川上浩司. 2018. 「学校健診データベース構築による地域健康増進と新規ヘルスケアニーズの探索」, 『近畿情報通信協議会誌 KICC』, 15:23-26, 2018 年. 寄稿
- 川上浩司. 2018. 「臨床疫学における医療系データベース活用ーライフコースデータ構築も視野にー」, 『医療ジャーナル増刊「新春展望 2018」』, 54 (S-1) :423-428, 2018 年. 寄稿
- 祐野 恵, 川上浩司. 2018. 「自治体が保有する健康情報の活用と政策立案」, 全国市町村文化研修所機関誌『国際文化研修』, vol.109, 50-54, 2018 年. 寄稿
- Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Toshiyuki Mizota, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Aki Kuwauchi, Woo Jin Joo, Yohei Kawasaki, and Koji Kawakami. 2018. “Utilization of arterial pulse waveform analysis during non-cardiac surgery in Japan: A retrospective observational study using a nationwide claims database,” Journal of Anesthesia, in press. 2018 年. 学術論文
- Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Yohei Kawasaki, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Aki Kuwauchi, Satomi Yoshida, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2018. “Prophylactic sivelestat for esophagectomy and in-hospital mortality: a propensity score-matched analysis of claims database,” Journal of Anesthesia, in press. 2018 年. 学術論文
- Masato Takeuchi and Koji Kawakami. “Ecological association between hemoglobin and hemoglobin A1c: a data-driven analysis of health checkup data in Japan,” Journal of Clinical Medicine. 7:539; Doi:10.3390/jcm7120539. 2018 年. 学術論文
- Masato Takeuchi, Sayuri Nakano, Sachiko Tanaka-Mizuno, Chika Nishiyama, Yuko Doi, Masaru Arai, Yosuke Fujii, Toshiyuki Matsunaga, and Koji Kawakami. 2018. “Adherence and concomitant medication use among persons on warfarin therapy: insight from large pharmacy dispensing database in Japan,” Biological and Pharmaceutical Bulletin, in press. 2018 年. 学術論文
- Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, Yuji Kanazawa, Morimasa Kitamura, Kazuki Ide, Koichi Omori, and Koji Kawakami. 2018. “Recurrent laryngeal nerve paralysis after thyroid cancer surgery and intraoperative nerve monitoring,” Laryngoscope, in press. 2018 年. 学術論文
- Shuhei Yamada, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2018. “A descriptive epidemiological study on the treatment options for head and neck cancer: transition before and after approval of Cetuximab,” Pharmacoepidemiology and Drug Safety, in press. 2018 年. 学術論文
- Motoko Nakayama, Shiro Tanaka, Shota Hamada, Takahiro Uchida, and Koji Kawakami. 2018. “Recalls and premarket review systems for high-risk medical devices in Japan,” Therapeutic Innovation & Regulatory Science, in press. 2018 年. 学術論文

- Sumihiro Kawano, Masato Takeuchi, Shiro Tanaka, Takehiro Yamashita, Taiji Sakamoto, and Koji Kawakami. 2018. "Current status of late and recurrent intraocular lens dislocation: Analysis of real-world data in Japan," Japanese Journal of Ophthalmology, in press. 2018 年. 学術論文
- Hiroshi Yonekura, Kazuki Ide, Yoshika Onishi, Isao Nahara, Chikashi Takeda, and Koji Kawakami. 2018. "Preoperative echocardiography for patients with hip fractures undergoing surgery: a retrospective cohort study using a nationwide database," Anesthesia & Analgesia, in press. 2018 年. 学術論文
- Masato Takeuchi, Shuichi Ito, Masaki Nakamura, and Koji Kawakami. 2018. "Changes in hemoglobin concentrations post-immunoglobulin therapy in patients with Kawasaki disease: a population-based study using a claims database in Japan," Pediatric Drugs, in press. 2018 年. 学術論文
- Ryusuke Miki, Carl Bradley Becker, Kazuki Ide, and Koji Kawakami. 2018. "Timing and Facilitation of Advanced Directives in Japan," Archives of Gerontology and Geriatrics, in press. 2018 年. 学術論文
- Korenori Arai, Yuki Teranishi, Tatsunori Murata, Sachiko Tanaka, Koji Kawakami, and Shunsuke Baba. 2018. "Cost-effectiveness of molar single-implant versus fixed dental prosthesis," BMC Oral Health, in press. 2018 年. 学術論文
- Tomotsugu Seki, Masato Takeuchi, Ryusuke Miki, and Koji Kawakami. 2018. "Follow-up tests and outcomes for patients undergoing percutaneous coronary intervention: Analysis of a Japanese administrative database," Heart and Vessels. Doi.org/10.1007/s00380-018-1224-3. 2018 年. 学術論文
- Takuya Kinoshita, Shiro Tanaka, Mieko Inagaki, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2018. "Prescription pattern and trend of oral contraceptives in Japan: a descriptive study based on pharmacy claim data (2006-2014)," Sexual & Reproductive Healthcare, in press. 2018 年. 学術論文
- Takahisa Tsukada, Izumi Sato, Norihiro Matsuoka, Takumi Imai, Yuko Doi, Masaru Arai, Yosuke Fujii, Toshiyuki Matsunaga, and Koji Kawakami. 2018. "Prescription of antidementia drugs and antipsychotics for elderly patients in Japan: A descriptive study using pharmacy prescription data," Journal of Geriatric Psychiatry and Neurology, 31(4), 194-202. 2018 年. 論文
- Kazuki Ide, Kahori Seto, Tomoko Usui, and Koji Kawakami. 2018. "Correlation between dental conditions and comorbidities in an elderly Japanese population: A cross-sectional study," Medicine, in press. 2018 年. 学術論文
- Calistus Wilunda, Satomi Yoshida, Shiro Tanaka, Yuji Kanazawa, Takeshi Kimura, and Koji Kawakami. 2018. "Exposure to tobacco smoke prenatally and during infancy and risk of hearing impairment among children in Japan: a retrospective cohort study," Paediatric and Perinatal Epidemiology, in press. 2018 年. 学術論文
- Mikito Hirakata, Satomi Yoshida, Sachiko Tanaka, Aki Kuwauchi, and Koji Kawakami. 2018. "Pregabalin prescription for neuropathic pain and fibromyalgia: a descriptive study using administrative database in Japan," Pain Research and Management, Article ID 2786151, 1-10. 2018 年. 学術論文
- Satomi Yoshida, Wilunda Calistus, Takeshi Kimura, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2018. Prenatal alcohol exposure and suspected hearing impairment among children: a population-based retrospective cohort study," Alcohol and Alcoholism, 53:221-227. 2018 年. 学術論文
- Hiroshi Yonekura, Kahori Seto, Kazuki Ide, Yohei Kawasaki, Shiro Tanaka, Isao Nahara, Chikashi Takeda, and Koji Kawakami. 2018. "Preoperative blood tests conducted before low-risk surgery in Japan: a

- retrospective observational study using a nationwide insurance claims database,” *Anesthesia and Analgesia*, 126:1633-1640. 2018 年. 学術論文
- Tomoko Usui, Masaru Funagoshi, Kahori Seto, Kazuki Ide, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2018. “Persistence of and switches from teriparatide treatment among women and men with osteoporosis in the real world: A claims database analysis,” *Archives of Osteoporosis* in press. 2018 年. 学術論文
- Izumi Sato, Yosuke Yamamoto, Genta Kato, and Koji Kawakami. 2018. “Potentially inappropriate medication prescribing and the risk of unplanned hospitalization among the elderly: A self-matched, case-crossover study,” *Drug Safety*, in press. 2018 年. 学術論文
- Satomi Yoshida, Kazuki Ide, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2018. “Prenatal and early-life antibiotic use and risk of childhood asthma: A retrospective cohort study,” *Pediatric Allergy and Immunology*, 29:490-495. 2018 年. 学術論文
- Chen Hongyan, Shiro Tanaka, Korenori Arai, Satomi Yoshida, and Koji Kawakami. 2018. “Insufficient sleep and incidence of dental caries in deciduous teeth among children in Japan: a population-based cohort study,” *The Journal of Pediatrics*, in press. 2018 年. 学術論文
- Osamu Miyake, Kyoko Murata, Shiro Tanaka, Hiroshi Ishiguro, Masakazu Toi, Kazuo Tamura, and Koji Kawakami. 2018. “Cost analysis with febrile neutropenia in Japanese patients with primary breast cancer: retrospective analysis of a randomized clinical trial,” *Japanese Journal of Clinical Oncology*, in press. 2018 年. 学術論文
- Izumi Sato, Hideki Onishi, Shuhei Yamada, and Koji Kawakami. 2018. “Prevalence and initial prescription of psychotropics in patients with common cancers in Japan, based on a nationwide health insurance claims database,” *Psycho-Oncology*, 27: 450-457. 2018 年. 学術論文
- Yoshihisa Miyamoto, Maki Shinzawa, Shiro Tanaka, Sachiko Tanaka-Mizuno, and Koji Kawakami. 2018. “Perioperative steroid use for tonsillectomy and its association with reoperation for post-tonsillectomy hemorrhage: a retrospective cohort study,” *Anesthesia and Analgesia*, 126:806-814. 2018 年. 学術論文
- Taichi Kawamura, Izumi Sato, Hiroshi Tamura, Yoko M. Nakao, and Koji Kawakami. 2018. “Influence of comorbidities on the implementation of the fundus examination in patients with newly diagnosed type 2 diabetes,” *Japanese Journal of Ophthalmology*, 62: 68-76. 2018 年. 学術論文
- Takaaki Minoura, Masato Takeuchi, Tatsuya Morita, and Koji Kawakami. 2018. “Practice patterns of medications for patients with malignant bowel obstruction using a nationwide claims database and the association between treatment outcomes and concomitant use of H2-blockers/proton pump inhibitors and corticosteroids with octreotide,” *Journal of Pain and Symptom Management*, 55: 413-419. 2018 年. 学術論文
- Fumiko Ono, Shiro Tanaka, Yoko M. Nakao, and Koji Kawakami. 2018. “Utilization of anticoagulant and antiplatelet agents among patients with atrial fibrillation undergoing percutaneous coronary intervention-Retrospective cohort study using a nationwide claims database in Japan-,” *Circulation Journal*, 82(2):361-368. 2018 年. 学術論文
- カール・ベッカー他. 2018. 『仏教と医療の協力関係』, 自照社出版, 2018 年 4 月. 著書
- Hiyoshi, K, Becker, C, Kinoshita A. 2018. What behavioral and psychological symptoms of dementia affect caregiver burnout? *Clinical Gerontologist*. 41(3):249-254. 2018 年 5-6 月. 学術論文

- カール・ベッカー. 2018. 「終末期に対する早期支援」, 『こころの未来』, 19 : 53, 2018 年 8 月. 寄稿
- カール・ベッカー. 2018. 「遺族の癒しと健康に関する研究」, 『こころの未来』, 19 : 69, 2018 年 8 月. 寄稿
- カール・ベッカー. 2019. 「日本の価値観を思い出す (京都新聞創刊 140 年記念特集)」, 『京都新聞』, 2019 年 1 月 1 日.
- Ishii, N., Murakami, M., Suzuki, T., Tagami, K., Uchida, S., Ohte, N. 2018. “Effects of litter feeders on the transfer of ¹³⁷Cs to plants,” Scientific Reports, 8 (1), art. no. 6691, 2018 年 12 月. 学術論文
- 宮野公樹. 2018. 「産学連携で問われるもの」, 『IDE 高等教育』, 603 : 55-60, 2018 年 8 月. 寄稿
- 宮野公樹. 2018. 「異分野融合とは何か?」, 『研究支援』, リバネス出版, 9 : 49, 2018 年. インタビュー記事掲載
- 宮野公樹. 2018. 「学問の「分野」を意識させることで、「分野」の垣根を取り払う。」, 『BuzzFeed News』, 2018 年 9 月 11 日. 寄稿
- 宮野公樹. 2018. 「最近の大学改革論がどうでもいいと思えるのはなぜ」, 『現代ビジネス』, 2018 年 10 月 29 日. 寄稿
- M.Fujita and K.Tabuchi, 2019. “A rebuttal to Akabayashi and colleagues’ criticisms of the iPSC stock project,” Journal of Medical Ethics, DOI : 10.1136/medethics-2018-105248, 学術論文
- 石橋章一郎, 佐野 亘, 土山希美枝, 南島和久. 2018. 『公共政策学』, ミネルヴァ書房, 2018 年 6 月. 著書
- 佐野 亘. 2018. 「第 1 1 章妥協を正しく位置づける」, 村田和代 編著『話し合い学の多様性』, ひつじ書房, 191-209 頁. 2018 年 9 月. 著書
- Yokoi T, Nakagawa Y, Miyagawa. 2018. “Asymmetric synthesis of tetrahydroquinoline-type ecdysone agonists and QSAR of their binding affinity against Aedes albopictus ecdysone receptors,” Pest Manag. Sci, DOI: 10.1002/ps.5160, 2018 年 8 月. 学術論文
- Juichi H, Ando R, Ishido T, Miyashita M, Nakagawa Y, Miyagawa. 2018. “Chemical synthesis of a two-domain scorpion toxin LaIT2 and its single-domain analogs to elucidate structural factors important for insecticidal and antimicrobial activities,” J. Peptide Sci, 24 : e3133, 2018 年 12 月. 学術論文
- 伊勢田哲治. 『科学哲学の源流をたどる 研究伝統の百年史』, ミネルヴァ書房, 2018 年 11 月. 著書
- 伊勢田哲治, 神崎宣次, 呉羽真編. 『宇宙倫理学』, 昭和堂, 2018 年 12 月. 著書
- 呉羽真, 伊勢田哲治, 磯部洋明, 大庭弘継, 近藤圭介, 杉谷和哉, 杉本俊介, 玉澤春史. 『将来の宇宙 探査・開発・利用がもつ倫理的・法的・社会的含意に関する研究調査報告書』, 2018 年. 報告書
- Kouki Shinoda, Shogo Tsuji, Shiroh Futaki, Miki Imanishi. 2018. “Nested PUF Proteins: Extending Target RNA Elements for Gene Regulation,” ChemBioChem, 19(2) : 171–176. 2018 年. 学術論文
- Koki Sakagami, Toshihiro Masuda, Kenichi Kawano, Shiroh Futaki. 2018. “Importance of Net Hydrophobicity in the Cellular Uptake of All-hydrocarbon Stapled Peptides,” Mol. Pharm, 15(3) : 1332–1340. 2018 年. 学術論文
- Ryo Hirata, Ayame Torii, Kenichi Kawano, Shiroh Futaki, Ayumi Imayoshi, Kazunori Tsubaki. 2018. “Development of Xanthene Dyes Containing Arylacetylenes: The Role of Acetylene Linker and Substituents on the Aryl Group,” Tetrahedron, 74(2) : 3608–3615. 2018 年. 学術論文

- Shogo Tsuji, Kouki Shinoda, Shiroh Futaki, Miki Imanishi. 2018. “Sequence-specific 5mC Detection in Live Cells Based on the TALE-split Luciferase Complementation System,” *Analyst*, 143(16) : 3793–3797. 2018 年. 学術論文
- Shota Ichimizu, Hiroshi Watanabe, Hitoshi Maeda, Keisuke Hamasaki, Yuka Nakamura, Victor Tuan Giam Chuang, Ryo Kinoshita, Kento Nishida, Ryota Tanaka, Yuki Enoki, Yu Ishima, Akihiko Kuniyasu, Yoshihiro Kobashigawa, Hiroshi Morioka, Shiroh Futaki, Masaki Otagiri, Toru Maruyama. 2018. “Design and Tuning of a Cell-penetrating Albumin Derivative as a Versatile Nanovehicle for Intracellular Drug Delivery,” *J. Control. Release*, 277(1) : 23–34. 2018 年. 学術論文
- Yusuke Azuma, Haruka Imai, Yoshimasa Kawaguchi, Ikuhiko Nakase, Hiroshi Kimura, Shiroh Futaki. 2018. “Modular Redesign of a Cationic Lytic Peptide to Promote the Endosomal Escape of Biomacromolecules,” *Angew. Chem. Int. Ed. Eng.*, 57(39) : 12771–12774. 2018 年. 学術論文
- 二木史朗. 2018. 「最前線 バイオ中分子・高分子の細胞内移行・送達にかかわる新しい視点」, 『ファルマシア』, 54(8) : 783–787. 2018 年. 総説
- 祐野 恵. 2018. 「地方レベルの議員の行動分析－議員研修の視座から－」, 『自治体学』, 31(1). 2018 年. 学術論文
- Masaharu Tsubokura, Yosuke Onoue, Hiroyuki A. Torii, Saori Suda, Kohei Mori, Yoshitaka Nishikawa, Akihiko Ozaki, Kazuko Uno. 2018. “Twitter use in scientific communication revealed by visualization of information spreading by influencers within half a year after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident,” *PLoS One*, 13(9): 1–14. 2018 年. 学術論文

学会発表等

- 木村丈, 井出和希, 川上浩司. 2018. 「学校健診情報の個人への可視化を通じた小児期の生活習慣病予防に関する研究」, 日本小児科学会第 121 回学術集会（福岡）, 2018 年 4 月 20—22 日. 口頭発表
- Kazuki Ide and Koji Kawakami. 2018. “General perceptions towards personal health records in Japan: A exploratory survey,” 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology(Kyoto), 2018 年 7 月 1–6 日. 口頭発表
- 武田親宗, 名原功, 川本修司, 清水覚司, 深川博志, 田中具治, 溝田敏幸, 米倉寛, 川崎洋平, 竹内正人, 川上浩司. 2018. 「傾向スコアを用いた腹部大動脈瘤人工血管置換術における波形解析機能付き動脈カテーテルの使用と予後の関連」, 日本心臓血管麻酔学会第 23 回学術大会（東京）, 2018 年 9 月 14—16 日. 口頭発表
- 佐藤亮, 松林恵介, 森島敏隆, 中田佳世, 田中司朗, 川上浩司, 宮代 勲. 2018. 「大阪府がん登録によるがん罹患歴のあるがん患者の有病率と臨床的特徴」, 日本臨床疫学会第 2 回年次学術大会（京都）, 2018 年 9 月 29–30 日. 口頭発表
- 新川神奈, 吉田都美, 関知嗣, 柳田素子, 川上浩司. 2018. 「DPC データベースを用いたネフローゼ症候群入院患者の静脈血栓症発症に関する記述研究」, 日本臨床疫学会第 2 回年次学術大会（京都）, 2018 年 9 月 29–30 日. 口頭発表
- 中嶋雅之, 井出和希, 川上浩司. 2018. 「切除不能結腸直腸がんへのレゴラフェニブ投与開始量と生存期間との関連：過去起点コホート研究」, 日本臨床疫学会第 2 回年次学術大会（京都）, 2018 年 9 月 29–30 日. 口頭発表

- Kazuki Ide, Kahori Seto, Tomoko Usui, Sachiko Tanaka, and Koji Kawakami. 2018. "Correlation between dental conditions and dementia: A cross-sectional study of an elderly Japanese population," 日本臨床疫学会第2回年次学術大会（京都），2018年9月29-30日．口頭発表
- Yasuyuki Honjo, Takashi Ayaki, Tomohisa Horibe, Hidefumi Ito, Ryosuke Takahashi, and Koji Kawakami. 2018. "FKBP12-immunopositive inclusions in patients with alpha-synucleinopathies," 第37回日本認知症学会学術集会（札幌），2018年10月12-14日．口頭発表
- 松山奈央, 竹内正人, 渡辺範雄, 川上浩司. 2018. 「大規模レセプトデータベースを用いたオレキシン受容体拮抗薬と非ベンゾジアゼピン系薬の処方実態に関する研究」, 第24回日本薬剤疫学会学術総会（仙台），2018年10月13-14日．口頭発表
- Satomi Yoshida, Yuichi Adachi, Masanari Kozawa, Cao Hui, Ki Lee Milligan, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2018. "Prevalence, incidence and treatment step of pediatric asthma in Japan from claims database study," 日本小児アレルギー学会第55回学術大会（岡山），2018年10月20-21日．口頭発表
- 松林恵介, 川上浩司. 2018. 「レセプトデータを用いた梅毒患者の配偶者に対する梅毒検査の実施状況調査」, 日本性感染症学会第31回学術集会（東京），2018年11月24-25日．口頭発表
- 吉田都美, 井出和希, 尾板靖子, 川上浩司. 2018. 「出生体重と中学3年時の肥満との関連：母子保健情報と学校健診情報の接続による疫学研究」, 日本学校保健学会 第64回学術大会（大分），2018年11月30日-12月2日．口頭発表
- 井出和希, 吉田都美, 尾板靖子, 川上浩司. 2018. 「学校健診レポートの有用性と健康情報の利活用に対する認識：連携17自治体の保護者を対象とした質問紙調査」, 日本学校保健学会第64回学術大会（大分），2018年11月30日-12月2日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「死別と霊性=Grief Care」, 霊性研究会（同志社大学），2018年4月15日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. "Why and How to Escape Overhyped Consumption," Consumption Conference (Gdansk University, Poland) 2018年4月18日．口頭発表（スカイプ基調講演）
- カール・ベッカー. 2018. "Japanese Spiritual Practices Facing Elder Care & Bereavement," ADEC Conference (Pittsburgh PA), 2018年4月27日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「死を見て生を考える」, ホリスティック教育会議（同志社大学），2018年7月19日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「看護に活かせる、いにしへの死生観」, 仏教看護ビハーラ学会（東大寺），2018年8月25日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. "Dangers and Directions in the Future of World Logotherapy," 4th International Logotherapy Conference (Moscow), 2018年8月28日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「仏教の死生観とケアを考える」, 門徒定期講演会（今治あかがねミュージアム），2018年9月12日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「日本人とスピリチュアリティ」, 日本スピリチュアルケア学会（札幌），2018年9月29日．口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「晩年を考える生きがい感と心身の行方」, 日本統合医療学会（札幌），2018年10月8日．口頭発表

- カール・ベッカー. 2018. “Supporting the bereaved around death,” Duke Nursing Conference (Duke University Medical School、Singapore) , 2018 年 10 月 30 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. “Why We Need Grief Care and How to Do It,” Grief and Bereavement Conference (Singapore Furama Riverfront Hotel) , 2018 年 10 月 31 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. “Japan’s Struggle to Enfranchise Grief Care,” Grief and Bereavement Conference (Singapore Assisi Hospice) , 2018 年 11 月 1 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. “Avoiding Burnout in Terminal Care,” Singapore Association for Social Workers (Singapore Assisi Hospice), 2018 年 11 月 2 日. 口頭発表
- カール・ベッカー. 2018. 「死を念頭に生きる～霊的現象と心のケア」, 人体科学 (愛知県、中部大学), 2018 年 12 月 1 日. 口頭発表
- 祐野恵, 井出和希, 東川玲. 2018. 「自治体における健康情報の活用と政策立案」, 第 32 回自治体学会 (青森県青森市) , 2018 年 8 月 24 日. 口頭発表
- Nobuhito Ohte, Tomoki Oda and Naoto Nihei. 2018. “Radioactive contamination in forested area in Fukushima after the nuclear power station accident in March 2011: Influences of the policy decision not to decontaminate forests on restarting of agriculture and life,” American Geophysical Union, Fall meeting 2018 (Washington DC), 2018 年 12 月 13 日. 口頭発表
- 吉田恭. 2018. 「街づくりと健康」, グローバルビジネス学会第 4 回全国大会 (早稲田大学) , 2018 年 7 月 8 日. 口頭発表
- 横井大洋, 中川好秋, 宮川恒. 2018. 「テトラヒドロキノリン型脱皮ホルモンアゴニストの構造活性相関」, 日本農薬学会第 43 回大会 (秋田県立大学) , 2018 年 5 月 26 日. 口頭発表
- 名部拓, 幌岩真理, 林謙一郎, 原島小夜子, 八木孝司, 中川好秋, 宮川恒. 2018. 「動物細胞 HEK293T を用いた幼若ホルモン様活性化化合物の定量的活性評価系の確立および in silico スクリーニングによる新規化合物の探索」, 日本農薬学会第 43 回大会 (秋田県立大学) , 2018 年 5 月 26 日. 口頭発表
- 幌岩真理, 中川好秋, 宮川恒. 2018. 「脱皮ホルモンアゴニストの In silico スクリーニング」, 日本農薬学会第 43 回大会 (秋田県立大学) , 2018 年 5 月 26 日. 口頭発表
- 義本裕介, Mohammed Abdel-Wahab, Moustafa Sarhan, 宮下正弘, 中川好秋, 宮川 恒. 2018. 「北アフリカ棲息種サソリ *Buthacus leptochelys* の毒液の成分分析および殺虫性ペプチドの探索」, 日本農薬学会第 43 回大会 (秋田県立大学) , 2018 年 5 月 26 日. 口頭発表
- 重吉沙衣, 田中千尋, 宮川恒, 入江俊一, 鈴木一実, 泉津弘佑. 2018. 「全ゲノム解析手法に基づく抗真菌性化合物 Tolnifanide の作用点の同定」, 日本農薬学会第 43 回大会 (秋田県立大学) , 2018 年 5 月 27 日. 口頭発表
- 伊勢田哲治 (発表者), 神崎宣次, 近藤圭介, 呉羽真. 「宇宙資源開発の倫理的問題」, 第 62 回宇宙科学技術連合講演会 (久留米シティプラザ) , 2018 年 10 月 25 日. 口頭発表

社会活動 (講演会・展示会などアウトリーチ活動など)

- 川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータと健康ライフコースデータの整備と今後」, 国立病院機構関東信越ブロック病院長会議 (東京) , 2018 年 4 月 20 日.

- 川上浩司. 2018. 講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその活用」, 茨城県市長会（水戸）, 2018 年 5 月 8 日.
- 川上浩司. 2018. 招待講演, 「医療リアルワールドデータ、ライフコースデータの基盤構築の最新状況」, 第 26 回日本乳癌学会学術総会（京都）, 2018 年 5 月 17 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「母子保健や学校健診、診療情報のデータベース構築と利活用の取組. 久留米大学小児科グラウンドラウンズ（久留米）, 2018 年 5 月 25 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「健康情報や医療情報の利活用. 三菱ケミカルホールディングスバックキャスト研究会（東京）, 2018 年 6 月 7 日.
- Koji Kawakami. 2018. “Medical real world data and life course data, ” Dai Nam University (Vietnam) , 2018 年 6 月 9 日.
- 川上浩司. 2018. 講義, 「健康情報や医療情報の利活用：ライフコースデータ、リアルワールドデータの基盤構築」, 国際医療福祉大学乃木坂スクール（東京）, 2018 年 6 月 18 日.
- 川上浩司. 2018. 特別講演, 「地域住民の健康、医療の歴史を繋げていくデジタルコホートの取組」, 第 4 回地域包括ケア病棟協会研究大会（札幌）2018 年 7 月 15 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「リアルワールドデータとデジタルコホートを活用した臨床疫学研究」, 虎の門病院臨床研究セミナー（札幌）, 2018 年 8 月 6 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「学校健診・母子保健情報のデータベース化と活用」, 岩手県市長会（二戸）, 2018 年 8 月 7 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「臨床研究の潮流：臨床試験からデータベース研究へ」, 臨床研究サテライトセミナー@広島 2018（広島）, 2018 年 8 月 25 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータの基盤と活用状況」, 動脈硬化 Update2018（東京）, 2018 年 9 月 1 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「リアルワールドデータやデジタルコホートを活用した薬剤疫学、臨床疫学研究」, ファルマビジネスアカデミー（東京）, 2018 年 9 月 10 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「SHINKA を続けるビッグデーターリアルワールドデータ活用による臨床研究の未来と人類への貢献ー」, 第 18 回臨床試験と CRC のあり方を考える会議 2018（富山）, 2018 年 9 月 16 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその活用」, 埼玉県町村会（埼玉）, 2018 年 9 月 25 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「自治体の所管する学校健診情報、母子保健情報のデータベース化とその活用」, 福井県・創生福井首長の会研修会（福井）, 2018 年 9 月 27 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「医療現場の情報統合による臨床研究、地域住民の健康の歴史を紡ぐデジタルコホートの取組」, 国立医薬品食品衛生研究所（川崎）, 2018 年 10 月 4 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「自治体での母子保健・学校健診、医療現場の情報の可視化と疫学への応用」, 第 77 回日本公衆衛生学会総会シンポジウム（郡山）, 2018 年 10 月 26 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータ、健康ライフコースデータの整備と臨床研究」, 第 55 回日本臨床生理学会総会（福岡）, 2018 年 11 月 3 日.
- 川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータと健康ライフコースデータ」, 生命科学インスティテュート（東京）, 2018 年 11 月 12 日.

川上浩司. 2018. 座長・講演, 「HTAの実施に向けたRWD基盤の整備」, DIA総会(東京), 2018年11月13日.

川上浩司. 2018. 講話, 「学校健診や母子保健情報の活用による生涯を通じた健康づくりや自治体政策に向けて」, 香川県大川地区学校保健研究大会兼大川地区園・小・中学校保健主事・養護教諭等研修会(香川), 2018年11月15日.

川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータ、健康ライフコースデータの整備と臨床研究」, 全国自治体病院協議会 薬剤管理研修会(東京), 2018年11月16日.

川上浩司. 2018. 講演, 「地域住民の健康の歴史を紡ぐデジタルコホート」, 神戸市民公開講座 第21回ひと・健康・未来シンポジウム(神戸), 2018年11月25日.

川上浩司. 2018. 講演, 「学校健診・母子保健情報のデータベース化と活用」, 新潟県医師会・学校保健研修会(柏崎地区)講演(柏崎), 2018年11月26日.

川上浩司. 2018. 講演, 「地域住民の幼少期からの歴史を紡ぐデジタルコホート: 学校健診、母子保健情報の活用」, 仙北インパクトチャレンジ(仙北), 2018年11月28日.

川上浩司. 2018. 講演, 「医療リアルワールドデータや健康ライフコースデータを用いた新たな健康社会にむけて」, 日本若手精神科医会(JYPO)(京都), 2018年12月9日.

川上浩司. 2018. 講演, 「情けに報いる: 診療情報の活用とライフコースデータ」, 枚方公済病院(枚方), 2018年12月20日.

川上浩司. 2018. 講演, 「学校健診、母子保健情報のデータベース化とその利活用」, 福祉自治体ユニット首長連絡会(東京), 2018年12月26日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「禅とこころ」, 禅とこころ講演シリーズ(花園大学), 2018年5月9日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「仏教徒の生き方と逝き方を考える」, 門徒定期講演会(高槻本願寺), 2018年6月16日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「高齢者社会」コミュニティーアウトリーチ授業(京大総合人間学部), 2018年7月3日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「仏教の死生観とケアを考える」, JASSC(大阪太融寺), 2018年7月13日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「仏教からグリーフケアを考える」, 妙心寺座禅会(和純会館), 2018年7月14日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「生と死とどう向き合うか」, 塚口教会チャーチカレッジ(塚口教会), 2018年7月14日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「スピリチュアルを視野に入れた終末期ケア」, メープル・クリニック(志賀町), 2018年7月15日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「日本人の死生観から生命倫理を学ぶ」, 第39回STiPS阪大研究会(大阪大学待兼山キャンパス), 2018年7月17日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「保育には仏教が必要なのか?」, 仏教保育社会議(京都、和純会館), 2018年7月24日.

カール・ベッカー. 2018. 講演, 「死別悲嘆と死生観」, ELP卒業生の会(京都大学橘会館), 2018年7月28日.

- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「超高齢社会を上手く生きられるか〜経営、個人、社会」, 京大公開講演 (パレスホテル東京), 2018 年 9 月 14 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「環境と芸」, (京都芸術大学), 2018 年 9 月 30 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「日本人の死生観: 環境と医療」, ELP (京都大学橘会館), 2018 年 10 月 27 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「老年期・終末期の医療希望に関する情報管理と活用法」, ライフステージにおける健康情報の管理 (市民公開講座、第 21 回ひと・健康・未来シンポジウム 2018 神戸), 2018 年 11 月 25 日.
- カール・ベッカー. 2018. 講演, 「日本人の死生観から考える ACP」, 国立長寿医療研究センター (愛知県大府市), 2018 年 12 月 14 日.
- 宮野公樹. 2018. 基調講演, 「新しい“methodology”への希求〜その困難と意義〜」, 東京大学農学部国際交流促進プログラムセミナー, 2018 年 11 月 28 日.
- 宮野公樹. 2018. 基調講演, 「異分野融合のダイナミクス」, 宮崎アカデミックカフェ, 2018 年 11 月 30 日.
- 宮野公樹. 2018. 基調講演, 科学技術振興機構「チームサイエンスの科学×ABD 読書会」キックオフ記念イベント, 2018 年 12 月 14 日.
- Nobuhito Ohte. 2018. 講演, “Nitrogen biogeochemistry in catchment ecosystems in Japan: Characteristics and research directions,” University of Naples Federico II, Department of Agriculture(Naples), 2018 年 4 月 9 日.
- 吉田恭. 2018. パネルディスカッション・ファシリテータ, 「ドイツの BID とこれからの日本のエリアマネジメント」, 全国エリアマネジメントネットワークシンポジウム 2018 in Osaka (グランフロント大阪), 2018 年 11 月 6 日.
- 吉田恭. 2018. 講演, 「エリアマネジメントについて」, 第 1 回浜大津でのエリアマネジメント導入に関する勉強会 (大津商工会議所), 2018 年 12 月 12 日.
- 吉田恭. 2019. 報告, 「梅田駅周辺エリアにおける CVM 調査の結果について」, 第 3 回内閣府地域再生エリアマネジメント負担金制度に関する有識者会議 (内閣府地域創生本部), 2019 年 1 月 21 日.
- 伊勢田哲治. 2018. 講演, 「宇宙進出の倫理」, 宇宙学サマースクール 2018 (京都大学理学研究科セミナーハウス), 2018 年 8 月 21 日.
- 二木史朗. 2018. 招待講演, 「クモ毒を改良し抗体を細胞内へ輸送」, バイオファーマジャパン (第 6 回、東京), 2018 年 4 月 20 日.
- 二木史朗. 2018. 招待講演, 「ペプチドを用いた生理活性分子の細胞内送達」, 日本ケミカルバイオロジー学会第 13 回年会・日本農芸化学会合同シンポジウム (東京), 2018 年 6 月 11 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 基調講演, “Peptide-mediated Delivery of Biomacromolecules into Cells,” 22th Korean Peptide Protein Society (KPPS) Symposium(Yoesu, Korea), 2018 年 6 月 26 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 招待講演, “Cytosolic Delivery of Biomacromolecules,” 15th Chinese International Peptide Symposium(Shenzhen, China), 2018 年 7 月 4 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 招待講演, “Peptide-mediated Delivery of Biomacromolecules into Cells,” Frontiers in Delivery of Therapeutics (Tartu, Estonia), 2018 年 8 月 23 日.

- Shiroh Futaki. 2018. 招待講演, “Cytosolic Delivery of Biomacromolecules,” 17th Akabori Conference: Japanese-German Symposium on Peptide Science, Lake Constance (Konstanz and Lindau, Germany), 2018 年 9 月 3 日.
- 二木史朗. 2018. 招待講演, 「ペプチドを用いた細胞膜の構造・物性変換」, 第 91 回日本生化学会大会 シンポジウム「生体膜の形態変化のメカニズム」(京都), 2018 年 9 月 25 日.
- Shiroh Futaki. 2018. “Peptide-mediated delivery of antibodies and bioactive proteins into cells,” MDO/JSSX in Kanazawa (日本薬物動態学会第 33 回年会/MDO 国際合同学会, Kanazawa), 2018. 10 月 3 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 基調講演, “Lipid packing loosening promotes the cellular entry of oligoarginine,” The Third A3 Roundtable Meeting on Chemical Probe Research Hub(Jeju, Korea), 2018 年 10 月 31 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 招待講演, “Lipid-sensitive amphiphilic peptides for intracellular delivery of biomacromolecules,” 8th Peptide Engineering Meeting (PEM8-2018, Berlin, Germany), 2018 年 11 月 8 日.
- Shiroh Futaki. 2018. 招待講演, “Lipid-sensitive amphiphilic peptides for intracellular delivery of biomacromolecules,” 10th International Peptide Symposium/55th Japanese Peptide Symposium(Kyoto), 2018 年 12 月 6 日.
- 二木史朗. 2019. 招待講演, 「ペプチドを用いた生理活性分子の細胞内送達」, Niigata Hybrid conference 2018 (新潟), 2019 年 2 月 9 日.
- Shiroh Futaki. 2019. 招待講演, “Cytosolic Delivery of Biomacromolecules,” Indian Peptide Society(Hyderabad, India), 2019 年 2 月 28 日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2018

2019年9月30日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]